木戸台遺跡

千葉県山武郡横芝町木戸台遺跡発掘調査報告

1977

横芝町教育委員会
横芝町木戸台遺跡調査団

木戸台遺跡

千葉県山武郡横芝町木戸台遺跡発掘調査報告

1977

横芝町教育委員会
横芝町木戸台遺跡調査団

序　　文

九十九里浜の中央に位置する横芝町は、殿塚・姫塚をはじめとする多くの古墳や山武姥山貝塚・牛熊貝塚などの原始古代の遺跡が多数所在しております。

近年、宅地造成・新道工事等の開発により、存在が脅かされつつある遺跡も少なくなく、埋蔵文化財の保護と地域開発との計画的な調和を図ることが重要な行政課題となつております。

木戸台遺跡は、栗山川と高谷川に浸蝕された樹支状台地にある古代から中・近世に至る遺跡ですが、昭和51年、農協事務所建設地として遺跡地の大幅な現状変更を余儀なくされるに至りました。そこで、横芝町教育委員会では、同遺跡を記録保存するため、緊急調査を実施いたしました。その結果、このほど貴重な調査成果を収め、本報告書の刊行となりました。本書が学術、郷土教育の資料として、広く活用されることを願つて止みません。

ここに本報告の刊行にあたり、調査を御快諾下された地主の吉岡豊氏をはじめ、山武考古学研究会員、参加者、協力いただいた方々に対し、厚く御礼申し上げます。

横芝町教育委員会

教育長　小　高　猶　次

例　　言

1．本書は、山武農業協同組合横芝事業所の大総支所建設に伴って記録保存を前提に、昭和51年10月1日より11月20日まで行なった発掘調査報告書である。

2．本遺跡は、木戸台第1号塚と称されたが、盛土下より縄文時代の遺構、中世土壙が多数検出されたので木戸台遺跡とした。

3．発掘調査は、横芝町教育委員会主催によって行なわれ、平岡和夫（山武古考学研究会）が担当した。

4．本書の執筆は、平岡和夫・湖口淳一・西山太郎・大賀健が行ない、執筆者名は文末に記しその文責を明らかにした。

5．本書は、稿筆上、塚を中心に編集したもので盛土下の遺構については、その概要を記載し別稿において発表を行なう。

6．発掘調査及び報告書作成にあたって、下記の方々の協力をいただいた。末筆ながら記して深く謝意を表わす次第である。

千葉県教育委員会・山武農業協同組合・山田友治・西山太郎

調　査　団　組　織

調査団長	小高猶次（横芝町教育委員会教育長）
調査担当者	平岡和夫（山武考古学研究会代表）
調査員	湖口淳一・松井義郎・大賀健・岡田弘・田口都
事務局	斉藤博（横芝町教育委員会・社会教育主事）
参加者	山武農業協同組合横芝事業所青年部・婦人部・農家組合・横芝町青年団・婦人会・菊池健一　鈴木美紀　田淵晃一（中央大学考古学研究会会員）
特別協力者	吉岡豊・横芝町消防団本部分団第3部
整理作業協力者	石井百々子・根本時子・石井揚子・丸静江・浅野葉子・石橋崇子

木　戸　台　遺　跡

本　文　目　次

序　文

例　言

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……1

Ⅲ　発掘調査経過……2

Ⅳ　塚の調査……5

1　マウンドの現況……5

2　マウンド構成の土層……5

3　マウンドの構築……6

4　マウンド内の出土物……6

Ⅴ　マウンド下の遺構と出土遺物……12

1　盛土下調査に至る経過……12

2　縄文時代……13

3　平安時代……15

Ⅵ　おわりに……19

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置……21
第2図　塚平面図……22
第3図　塚断面図……23
第4図　塚盛土下検出の遺構全体図……24
第5図　土壙実測図……25
第6図　土壙実測図及び出土遺物実測図……26
第7図　盛土内出土遺物　(1)……27
第8図　〃　(2)……28
第9図　〃　(3)……29
第10図　〃　(4)……30
第11図　〃　(5)……31
第12図　〃　(6)……32
第13図　石器　(1)……33
第14図　石器　(2)　縄文時代早期の土器(1)ー炉穴出土　……34
第15図　縄文時代早期の土器(2)ー炉穴出土……35
第16図　〃　(3)炉穴出土，グリッド内出土……36
第17図　〃　(4)グリッド内出土……37
第18図　〃　(5)グリッド内出土……38

図　版　目　次

図版１　1.発掘前塚遺存状況　2.3.塚断面（西側）
図版２　1.第２号炉穴　2.第３～５・17・18号炉穴、第２・３号ピット　3.第６号炉穴
図版３　1.第７号炉穴　2.第８号炉穴　3.第９号炉穴
図版４　1.2.3.第10号炉穴遺物出土状況
図版５　1.第21・22号炉穴、第４～６・９号ピット　2.第31号炉穴遺物出土状況
3.第40号炉穴遺物出土状況
図版６　1.2.第14号土壙遺物出土状況
図版７　1.炉穴群（Ⅰ群）　2.塚基段部遺物出土状況　3.第１号土壙遺物出土状況
図版８　1.第１号土壙遺物出土状況　2.第１号土壙　3.第２号土壙
図版９　1.第５号土壙玉出土状況　2.第５・６号土壙　3.第10号土壙
図版10　1.第11号土壙　2.（Ｅ－４）Ｇｒｉｄ ナイフ形出土状況
3.第６号壙内ポイント形石器出土状況
図版11　盛土内出土遺物（縄文時代後期１）
図版12　盛土内出土遺物（縄文時代後期２）
図版13　盛土内出土遺物（古墳時代１）
図版14　盛土内出土遺物（古墳時代２）
図版15　盛土内出土遺物（埴輪１）
図版16　盛土内出土遺物（埴輪２）
図版17　盛土内出土遺物（形象埴輪，埴輪３）
図版18　盛土下出土遺物（石器）
図版19　盛土下出土遺物（縄文時代早期１）
図版20　盛土下出土遺物（縄文時代早期２）
図版21　盛土下出土遺物（縄文時代早期３）
図版22　盛土下出土遺物（縄文時代早期４）
図版23　盛土下出土遺物（縄文時代早期５）
図版24　盛土下出土遺物（縄文時代早期６）
図版25　盛土下出土遺物（縄文時代早期７）
図版26　盛土下出土遺物（縄文時代早期８）
図版27　盛土下出土遺物（第１号土壙出土遺物）
図版28　1.塚基段部出土遺物　2.盛土下出土遺物（第５号土壙出土遺物）

Ⅰ 調査に至る経過

千葉県東南部、九十九里地方のほぼ中央部に位置する山武郡は、米・野菜を中心とする農村地域である。

昭和51年、山武農業協同組合では、同組合横芝事業所内の大総支所が、大正初期に建設されたもので非常にいたみが激しく老朽化していると共に、県道（芝山ー横芝線）を挟んで町立小学校が隣接している為に、農作物等の出荷作業により県道が混雑・渋滞し交通事故の危険性が指摘されていた。その為に、同組合では新たに現支所より北、約300mの地区、横芝町木戸台138の1番地に支所移転の計画を立てた。そして、町教育委員会に埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあり、調査した結果、中・近世と思われる塚1基の所在が確認され、その旨を県文化課に連絡した。その後、遺跡の取扱いについて、県文化課・町教育委員会・山武農業協同組合の三者による事前協議が再三行なわれ、支所予定地は既に買収済みであり、他の土地に移転するについては不可能との事で、記録保存もやむを得ないとの結論に達した。

県文化課の指導により、町教育委員会教育長を団長とする発掘調査団を組織し、発掘調査を昭和51年10月1日より11月23日までの54日間にわたって実施した。（平岡）

Ⅱ 遺跡の位置と環境

木戸台遺跡は、国鉄総武本線横芝駅より北西約4.5ｋｍの地点にあって、千葉県山武郡横芝町木戸台138番地に位置する。

横芝町は、栗山川に沿って南北に細長く、その地形は、洪積層からなる下総台地と沖積層からなる九十九里平野とから形成されている。台地は、栗山川及びその支流の高谷川による樹支状の浸蝕谷によって、複雑な開析を受けている。台地の標高は、30mから40mであり、台地面は平坦で、畑地や森林として利用されている。本遺跡は、栗山川とその小河川に浸蝕された樹支状台地の一角にあり、東側に小支谷を望む山林中に存在する。

この台地上には、先史時代から歴史時代にかけての数多くの遺跡が、点在している。縄文時代の遺跡は、慶応大学考古学研究室によって実施された分布調査によると、縄文時代前期の花積下層式土器を用いた人達が最も古く、晩期姥山式まで確認されている。特に、山武姥山貝塚は、本地方最大の貝塚で七つの貝塚群からなっており、貝類魚獣骨とともに土器片も多く包含されている。又、姥山貝塚は、晩期土器型式「姥山式土器」の標式遺跡として有名である。この他にも、縄文時代中期の木戸台貝塚、縄文時代後期の鴻ノ巣貝塚、鴻ノ巣貝塚形成後と考えられる牛態貝塚が存在する。又、遺物として注目されるのは、現在よりはるかに広く展開していたであろう河川、沼、小支谷の重要な交通機関として利用されたと考えられる独木舟、櫂なども発掘、発見されている。

弥生時代の遺跡、遺物は縄文時代や古墳時代のそれと比較すると、非常に少なくなっている。これは、横芝町だけでなく、この周辺地域全体にも見られることであり、縄文時代晩期の遺跡の減少とともに現段階では明らかでない。その数少ない遺物の一つに、中台発見の磨製石剣、

周辺になるが、光町新井橋出土の弥生時代後期の土器がある。いずれにしても、今後資料の増加を待って、解明せねばならない問題であろう。

古墳時代の遺跡としては古墳群が見られ、中台・木戸台・町原・取立の四地域に古墳群の分布が見られる。中台古墳群は、横芝町の最西端にあたり、北側が芝山町、南側が松尾町となっている。この古墳群は、昭和31年に早稲田大学教授滝口宏氏らによって、発掘調査がなされており、その成果によると中心に殿塚・姫塚の2基の大形前方後円墳があり、接して、小円墳が5基、東方に前方後円墳1基、小円墳2基、西方に前方後円墳1基、小円墳5基、姫塚の北方に円墳1基があり、前方後円墳を中心にして円墳からなる三つのグループに分けられ、総数17基が確認されている。本古墳群の存在は、大正5年刊行の「山武郡郷土誌」の中にも紹介されている。木戸台古墳群は、中台から町原へ向かう県道沿いに存し、木戸台貝塚の南200mの地点に位置し、前方後円墳1基、円墳2基からなる。中台古墳群と比べ、小規模なものである。本遺跡は、この木戸台古墳群のほぼ中央に位置している。町原古墳群は、木戸台古墳群の南方約500mの地点にあり、台地の最東端部に位置していたものであるが、年々の耕作等により除々に削平されてしまい、現在は殆んど消滅している。取立古墳群は、横芝町存在の古墳群では、中台古墳群と匹敵する規模を有するものであったが、耕地整理、耕作等によりその殆んどを破壊されてしまい、十分な記録も残されていない。このように町原・取立古墳群のように、耕作や耕地整理などによって破壊されてしまい、十分な記録も残っていないというような事は、この二つの古墳群だけに限った事ではなく、今現在、その姿をとどめている他の古墳群にも、その危険性はあり、今回の木戸台遺跡の調査もそのひとつのあらわれであろう。遺跡の保存が急務であろう。

以上、横芝町存在の遺跡の概要を述べてみたが、発掘調査の事例は非常に少なく、単にひとつの遺跡の発掘だけでは、その地域的な研究とはいえず、周辺地域との関連をも考えながら、調査・研究の必要があろう。（平岡）

Ⅲ　発掘調査の経過（昭和51年10月1日～11月20日）

10月1日晴れ、盛土の遺存状況の撮影を行ない、トレンチ設定を行なった。

10月2日晴れ　Aトレンチ・Bトレンチの掘り下げ作業を開始した。

10月3日晴れ　Bトレンチ東側掘り下げ作業を完了、セクションの実測及び写真撮影を行なう。Aトレンチ南側の旧表土層下にて、土壙及び焼土群を検出する。

10月4日晴れ　Aトレンチ南側セクションの実測及び写真撮影を行なう。Bトレンチ西側の塚基段部より長頸壷を検出する。出土状況の実測及び写真撮影を行なう。

10月5日晴れ　Aトレンチ北側セクションの実測及び写真撮影を行なう。

10月6日晴れ　Bトレンチ西側セクションの実測及び写真撮影を行なう。

10月7日晴れ　盛土下調査の為、旧表土層まで重機により削平を行ない、遺構の確認作業を始める。

10月8日晴れ　1号土壙を確認する。半裁して掘り下げ、セクションの実測を行なう。

10月9日雨　　作業中止

10月10日晴れ　（A－3）グリッドにおいて2号土壙、（B－4）グリッドにおいて1号炉穴、（B－3）グリッドにおいて2号炉穴を確認する。（E－1・2）及び、（F－1・2）グリッドで検出した。焼土群において3号～7号炉穴を確認する。

10月11日晴れ　（C－3・4）及び（D－3・4）グリッドにおいて焼土群を検出する。確認面を下げて8号～16号炉穴及び土壙1基を確認する。

10月12日晴れ　（E－1・2）及び（F－1・2）グリッドにおける焼土群において、17号18号炉穴及び2号・3号ピットを確認する。又、（D－3）及び（D－4）グリッドにおいて、19号～22号炉穴及び4号～6号・13号ピットを確認する。（E－3）グリッドにおいて土壙2基を確認し、5号・6号土壙と命名する。

10月13日晴れ　（C－3・4）及び（D－3・4）グリッドにおける焼土群において、23号～28号炉穴を確認する。又、ピット6基、土壙4基を確認する。

10月14日雨　　作業中止

10月15日曇り時々雨　焼土群確認作業を引き続き行なう。（C－4）グリッドにおいて、29号～34号炉穴を確認する。

10月16日雨　　作業中止

10月17日曇り　2号・3号・4号土壙の調査を開始する。半掘してセクションの実測を行なう。（D－4）及び（E－4）グリッドにおいて14号土壙を確認する。

10月18日雨　　作業中止

10月19日曇り　1号・2号炉穴の調査を始める。半掘してセクションの実測及び写真撮影を行なう。並行して2号・3号土壙の平面実測及び調査終了写真の撮影を行なう。

10月20日曇り後雨　本日より予算の都合上、調査員のみの発掘調査となる。5号・6号土壙の調査を行なう。半掘してセクション実測及び写真撮影を行なう。

10月21日雨　　作業中止

10月22日曇り　9号～14号・25号炉穴の調査を始める。半掘してセクション実測及び写真撮影を行なう。7号土壙のセクション実測を行なう。

10月23日曇り時々雨　3号～5号・17号・18号炉穴及び2号・3号ピットを半掘し、セクションの実測・写真撮影を行なう。その後、完掘して平面実測・写真撮影を行なう。

10月24日雨　　作業中止

10月25日曇り　1号・4号土壙を完掘し、平面実測・写真撮影を行なう。

10月26日晴れ　5号・6号土壙を完掘し、平面実測を行ない終了写真の撮影を行なう。

10月27日晴れ　19号・20号炉穴を半掘し、セクションの実測・写真撮影を行なう。完掘した

後、写真撮影を行なう。14号土壙の調査を始める。14号土壙内において35号～38号炉穴を確認する。

10月28日雨　　作業中止

10月29日晴れ　6号炉穴の調査の為、（F－1）グリッドの拡張を行なう。35号～44号炉穴及び10号土壙、6号ピットを確認する。

10月30・31日雨　作業中止

11月1日曇り　21号・22号炉穴、4号～6号・13号ピット、9号土壙の調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。その後、全掘して平面実測・終了写真を撮影する。

11月2日曇り　6号・39号・40号炉穴及び15号土壙の調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。

11月3日雨　　作業中止

11月4日曇り　24号・26号～28号炉穴、9号～12号ピットの調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。28号炉穴出土遺物の平面実測を行なう。

11月5日晴れ　7号・8号・15号・16号炉穴の調査を行なう。半掘してセクション実測・写真撮影の後、全掘して平面実測・写真の撮影を行なう。

11月6日晴れ　6号・39号～44号炉穴、14号ピット、10号土壙の調査を行なう。その後、終了写真の撮影を行なう。

11月7日晴れ　8号土壙の調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。

11月8日雨　　作業中止

11月9日晴れ　23号・31号～34号炉穴の調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。11号土壙の調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。

11月10日晴れ　14号土壙の調査と並行して、35号～38号炉穴の調査を行なう。セクションの実測・写真撮影の後、セクションベルトを除去して土壙内出土一括土器の平面実測・写真撮影を行なう。

11月11日晴れ　29号・30号炉穴、13号土壙の調査を行なう。半掘してセクションの実測・写真撮影を行なう。1号・2号炉穴を完掘し、平面実測・写真撮影を行なう。

11月12日雨　　作業中止

11月13日曇り　24号・26号・27号・29号・30号炉穴、9号～12号ピットの完掘を行ない写真撮影を行なう。

11月14日晴れ　9号・10号・19号・20号・23号・25号炉穴、7号・8号ピットの完掘を行ない写真撮影を行なう。

11月15日晴れ　7号・8号土壙を完掘し平面実測・写真撮影を行なう。11号～14号炉穴を完掘し写真撮影を行なう。

11月16日晴れ　31号～34号炉穴の完掘を行ない写真撮影を行なう。11号・12号土壙を完掘し平面実測・写真撮影を行なう。

11月17日晴れ　13号土壙を完掘し写真撮影を行なう。（C－3・4）及び（D－3・4）グリッド内検出の炉穴・土壙・ピットの平面実測を開始する。

11月18日雨　作業中止

11月19日曇り　17日の作業の続きを行なう。

11月20日晴れ　遺跡の全体清掃を行なう。

（大賀）

Ⅳ 塚の調査

1 マウンドの現況

本塚は、N－6°－Wを示し、南北径22.5ｍのほぼ21.8ｍのほぼ正方形を呈する。墳高は現地表面から2.5ｍを計る大形の塚である。

塚の遺存状態は極めて良好であり、東側中腹部が一部攪乱されている以外は、攪乱は見受けられず、各コーナーの稜は明確に見られ、墳頂部平坦面も径1.5ｍ前後でほぼ中央に位置している。本塚の周囲には古墳が群をなしており、北東側、北西側には隣接して古墳がある。又、舌状台地の縁辺部のため、南側は谷に向かって地形傾斜している。そのため本塚を実際の規模より高く見せており、形状も整っているためその眺めは壮観である。

2 マウンド構成の土層

本塚のマウンド構成の土壌は、磁北に沿って設定した東西（A）トレンチ、南北（B）トレンチの断面を観察したものである。

マウンドの構成は、黒色土層を基盤とした暗褐色土層、ローム粒子、ローム・ブロックを混入した土壌を主体に積み上げている。

移動層

Ⅰ　表土層

Ⅱ　黒色土層

Ⅲ　暗褐色土層（ローム粒子混入）

Ⅲ　褐色土層（ローム・ブロック混入）

Ⅴ　黒褐色土層

Ⅵ　明褐色土層（ローム粒子混入）

自然層

Ⅶ　黒褐色土層

Ⅷ　褐色土層

Ⅸ　ローム層（ソフト・ローム）

自然層のⅦ層黒褐色土は硬くしまっており、構築当時の旧地表面と考えられる。また、Ⅷ層褐色土層中には縄文式土器片、ローム上面には焼土等も検出され、マウンド下には構築以前の

遺構の存在が確認された。

移動層はⅠ層からⅦ層直上層のⅥ層までと考えられ、Ⅱ層、Ⅲ層はレンズ状に積み上げられているが、下位のⅢ層からⅥ層は細かな層序になっている。Ⅲ層・Ⅴ層は硬くしまっており、この土層は裾部に近い付近に多く積まれており、中央に近いところは比較的軟弱な土壌となっている。移動層は全体にローム粒子、ローム・ブロックの混入が見られ、上位の土層より中位に多く含まれている。

3　マウンドの構築

マウンドの構築状態は、東西、南北の2本のトレンチによって観察した。構築方法は周囲の旧地表面とロームを削って壇を設け、その上に積みあげたもので、盛土は層がブロック状に細かくなっている。この土層は暗褐色土にローム粒子、ブロックを混入したものが主体になっている。裾部付近の土層は硬くしまった土壌を用い、中央部に向かって薄くなっている。いわゆる、すり鉢状に積みあげている。中位部の土壌は、ローム・ブロックを多量に含んだ褐色土を主体とし、ブロック状に盛土しており、比較的軟弱である。又この土層は、特に南側中腹部に位置する土層中からは、多量の埴輪片が出土しており、これは隣接する古墳のマウンド裾部を削りとった土壌と考えられる。また、頂部周辺の土壌は硬くしまっており、ロームは殆んど含んでいない。

以上、細かく本塚の構築状態を述べてきたが、全体的には周囲の土壌を中央にブロック状に積み、その周囲に硬くしまった土壌を中央に向かって薄くし、その上位にブロック状の土壌を盛り、最後に硬くしまった土で蓋をするような状態で、平坦に積みあげていく方法が用いられている。（平岡）

4　マウンド内の出土遺物

縄文式土器

塚封土内からは、縄文時代早期及び後期に属する土器片が検出されている。早期条痕文土器については、炉穴が検出されているので稿を改めて炉穴と共に述べることとする。ここでは、後期の土器について述べてみたい。

第1群（第7図）　　縄文を主文とする土器の一群

a類（第7図－1～7）

縄文を主文とし、口縁部のやや内傾する深鉢であろう。原体ＬＲ、ＲＬの縄文が施されている。1の口縁部内側には沈線がめぐっている。1以外は胴部等の破片である。

b類（第7図－8・9）

口縁部のやや内傾する深鉢であろう。口唇部に小突起を有する。口縁に平行して列点が一周し、以下原体ＲＬの縄文が施されている。沈線により文様帯が区画され、以下無文帯となっている。焼成・胎土とも良好である。

c類（第7図－10）

口縁部の緩やかに外反する深鉢の口頸部であろうか。原体ＲＬの縄文を地文とし、平行沈線

を施してある。胎土・焼成とも良好である。

d類（第7図－11）

口縁部が短く折れる小形の鉢形土器であろうか。口唇部とそれに平行して竹管状の刺突文がめぐり、沈線以下RLの縄文が施されている。

e類（第7図－12）

縄文である地文上に隆帯が施されているが、部分的に縄文によって整形を再度行なっている。即ち、縄文施文→隆帯貼付→縄文整形の順による製作である。

f類（第7図－13・14）

磨消縄文が特徴的な土器である。原体RLの縄文を施し、磨消ししたうえ、沈線により文様を区画している。胎土・焼成とも良好である。

g類（第7図－15～18）

いずれも破片であり、粗雑な縄文が特徴的であり、第2群と共通する。

第2群（第7図，第8図－19～45）　条線を特徴とする一群

a類（第7図－19・20）

口縁部がやや外反する深鉢形土器。粗い縄文のうえに条線が施されている。

b類（第7図－21）

口縁部がやや外反する深鉢形土器。粗い縄文のうえに条線が施されている。口縁に指押が連続して施してある。

c類（第7図－22）

深鉢形土器。口縁部に貼付されている紐線には指押が連続して施してある。粗い縄文上に条線が若干認められる。

d類（第7図－23）

口縁部のやや外反する深鉢形土器。粗い縄文を地文とし、条線を配して、口縁に連続的に指押を施してある。

e類（第7図－24～35，第8図－36～45）

粗い縄文のうえに斜行、横走、格子状の条線が施されている土器である。条線の配し方によって次のように分類することができる。

イ）比較的太い条線によって斜行、横走する条線が施されている。例えば、第7図－24～35である。

ロ）斜行条線であるが、条線の間隔があり、イ）と比べ条線がやや細いようである。施文工具が異なるものであろうか。例えば、第8図－36～38である。

ハ）条線がイ）ロ）に比べて著しく少ない。斜行する条線が特徴的である。例えば、第8図－39・40である。

ニ）竹管状の工具によって描かれている条線が特徴的な一群。第8図－41～43である。

ホ）条線が細かく、地文である縄文が他とやや様相を異にする点が特徴であろうか。第8図

－44・45である。

これらの分類は便宜的なものであり、ｅ類のバラエティーと考えるべきであろう。

ｆ類（第８図－46～48）

無文の地であり、46・47は横走する条線が施されている。48は底部であり、針行する条線が施されている。

第３群（第８図－49～51）

49は、波状に縁の深鉢形土器で、口縁部が大きく開き、胴下半から底部にかけて直立する。口縁部は無文帯であり、口頸部以下には条線が施されているものと思われる。胎土・焼成とも良好である。

50は、口縁部のやや内傾する深鉢形土器であろう。口縁部が肥厚する。無文土器である。胎土・焼成とも良好である。

51は、横走する沈線に刻目を施してある。焼成・胎土とも良好である。

以上、塚封土より出土した縄文式土器を分類した。次いで、これらがどの時期に位置するかを考えてゆきたい。

本遺跡では縄文時代早期のファイヤー・ピットが確認されており、その時期は出土土器から茅山式期のものと考えられる。ここでは、このような縄文時代早期以外の土器を紹介しているわけであるが、後期でも中葉（加曽利Ｂ式）が主体的である。特に、第２群の条線が特徴的な土器群が数量的に多い点が目立った。後期中葉に位置すると考えられるものは、第１群ａ類（第７図－１～７）、ｂ類（第７図－８・９）、ｃ類（第７図－10）、ｄ類（第７図－11）、ｆ類（第７図－13・14）、ｇ類（第７図－15～18）。第２群ａ類（第７図－19・20）、ｂ類（第８図－36～45）、ｆ類（第８図－46～48）。第３群（第８図－49～51）などであり、本項で紹介したもの大部分が含まれる。しかし、第　図ａ類等時期の判別が困難な土器片もあるが、第２群の土器が数量的に多いことなどから、本地点は縄文時代後期中を中心とする遺跡であったと理解した。本地点出土の縄文式土器は、このように縄文時代後期中葉を主体としている。

加曽利Ｂ式は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの三つに分類されている。本遺跡では、口縁から胴下半まで殆んど直線的な深鉢形土器、即ち、堀之内式的土器はまったく発見されていない。また、平尾遺跡によれば、本遺跡の土器は第Ⅱ段階の加曽利Ｂ式土器である。更に、下北原遺跡の第７群土器（加曽利ＢⅠ式比定）はまったく出土していない。従って、このような点から本遺跡出土土器は、加曽利ＢⅡ式ないしＢⅢ式に属するものと考えられよう。

小括

本遺跡から出土した縄文時代の土器は早期（茅山式）、後期（加曽利Ｂ式）である。早期の土器については、別に述べられることになっているので、ここでは縄文時代後期中葉（加曽利Ｂ式）については若干考えてみたい。本遺跡出土の縄文時代後期中葉（加曽利Ｂ式）は、既に述べたように、中葉でも後半のものと考えられる。即ち、加曽利ＢⅡ式ないしⅢ式土器である。

この遺跡は、栗山川の支流の高谷川が形成する支谷と、九十九里平野から直接延びる谷によ

って形成された台地上に立地する。この台地はいわゆるやせ尾根であり、谷が両側からせまっている。この台地上には、中台遺跡、中台貝塚、角田（鴻ノ巣）貝塚、木戸台貝塚、寺方遺跡坂田遺跡等が所在する。このうち、縄文時代後期の遺跡は、次の通りである。後期初頭（堀之内式期）－中台貝塚、木戸台貝塚、寺方遺跡（参考：山武姥山貝塚）（西山）

（参考文献）

中村恵次・斉木勝編「千葉市中野僧御堂遺跡」1976．日本道路公団・（財）千葉県文化財センター発行

山内清男「日本先史土器図譜」1976　先史考古学会

平尾遺跡調査会編集「平尾遺跡調査報告Ⅰ」1971

神奈川県教育委員会　東正院遺跡調査団編集・発行「東正院遺跡調査報告」1972

神奈川県教育委員会社会教育部文化財保護課編集「神奈川県埋蔵文化財調査報告14－下北原遺跡」1977．神奈川県教育委員会発行

曽谷貝塚発掘調査団編「曽谷貝塚Ｄ地点発掘調査概報」1977　市川市教育委員会発行

古墳時代

土師器

坏形土器（第８図－１～３、第９図－27～32）

１．口径12.2㎝、器高3.8㎝、底部径7.4㎝の半完形品である。丸味をおびた平底の底部より緩やかに立ちあがり、口縁部は直立している。器表面には、ヘラ削りが施されており、内面はハケ目痕が残っている。胎土・焼成は良好で底部には一部木葉痕が見られる。

２．口径9.8㎝、器高3.8㎝、底部6.4㎝で底部を一部欠損している。平底の底部から緩やかに内彎しており、口径に比し器高の高いものである。器内外面に輪積み痕が残っており器肉も1.2㎝を計り、粗雑なもので胎土・焼成ともに不良である。底部には木葉痕が見られる。

３．口径12.4㎝、器高5.0㎝、底部径7.2㎝全体の$\frac{1}{2}$を欠損する。平底の底部より直線的に立ち上がり、口唇部より２㎝の所で極端に内彎する。そのため、明瞭な稜を持っている。底部には木葉痕が見られ、胎土・焼成は良好である。

27・28　口縁部片で、鋭く突き出した稜を持つものである。器内は両者とも非常に薄く、胎土・焼成ともに良好である。

29　口径15.2㎝、全体の$\frac{1}{3}$を遺存する。器中位に稜を持ち極端に内彎するものであり、口縁部はハケによる整形で、体部は横方向のヘラ削りが見られる。器肉は薄く胎土・焼成とも良好である。

30・31　27・28と同様口縁部片で、30はやや直立ぎみの口縁である。

32　須恵の底部片である。

坏・甕形土器底部片（第８図・第９図－４～24）

底部片で既に木葉痕が見られ胎土中に小石を含んでおり、焼成はやや良好である。形態は、底部から直接胴部に移行するものと、５㎜程直立してから胴部に移行するものとの両者がある。

高坏形土器（第９図－25・26）

25　坏部18.2㎝・器高13.1㎝・底部計10.8㎝を計る。坏部はやや下位に明瞭な稜を持ち外反しながら口縁部に移行するものである。脚部はほぼ直立切みの太いもので、裾部で広がりをみせている。

26口径17.8㎝・脚部一部を欠損している。坏部中位に稜を設け口縁部は外反しており、整形は坏部表面が横方向のハケ目痕が残り、下位はヘラ削りが施されている。脚部は胎土・焼成とも良好である。

甕形土器（第９図－33・34）

33　口径20.0㎝・口縁部片で比較的小型のもので、口縁部表面にはハケ目が、胴部には縦方向のヘラ削りが施されている。胎土に小石を含み、焼成はやや良好である。

土製支脚

35　長さ11.9㎝・断面は円形を呈し、最大径４.５㎝位を測る。ほぼ全形をとどめている。表面は強く、熱を受けたらしく、赤褐色を呈し、もろい。

埴輪（第10～12図）

埴輪は西側に隣接した古墳（前方後円墳）のものをマウンド盛土の際、運びこまれたものと考えられる。出土状態は、Ⅲ層・Ⅳ層の土層中に限られ、まとまって出土しており全て破片である。埴輪の種類は、円筒埴輪・形象埴輪の両者が見られるが、形象埴輪は２点で、圧倒的に円筒埴輪が多くなっている。以下円筒埴輪を分類すると、口縁部７点・胴部46点・底部７点・総数60点である。

口縁部

Ⅰ　口縁が外反したいわゆる朝顔状のもので、器肉も７㎜と薄い。口縁部直下１.５㎝位から細かい浅いクシ目が施されている。内面にも縦方向のクシ目が施されている。内面にも縦方向のクシ目が施されている。（25・30）

Ⅱ　口縁部が外反するもののⅠ類より、そりが浅いもので口縁直下１.５㎝位から細かな深いクシ目が縦方向に施されている。内面は素焼で器肉は１㎝とⅠ類に比べやや厚いものである。（28）

Ⅲ　口縁部がほぼ直立しており、口縁直下２㎝のところに突帯がめぐらされている。クシ目も荒く、Ⅰ類・Ⅱ類に比べ焼成・胎土とも不良である。（10・27）

Ⅲ　Ⅲ類同様口縁部が直立するものであるが、突帯は施されていない。口縁部から直接縦方向の荒いクシ目が施されている。器肉は１㎝と厚くなっている。（18）

Ⅴ　口縁部直立しており、口縁直下５㎜位から太いクシ目で整形されているものである。胎土・焼成ともに不良である。（14）

胴部

Ⅰ　器肉７㎜と最も薄く、きめの細かなもので細かいクシ目が施されている。数量は全体の15％位である。

Ⅱ　器肉1㎝前後のもので胎土・焼成とも良好で、細かなクシ目が深く施されている。全体の35％である。

Ⅲ　器肉1.2㎝と最も肉厚なもので焼成・胎土とも不良である。器面には太いクシ目が施されている。全体の40％と最も多い。

底部

Ⅰ　底部がやや外反する。細かなクシ目が下位まで施されており、焼成・胎土とも良好である。

Ⅱ　器肉2㎝と非常に厚手のものである。太いクシ目が施されており胎土・焼成とも不良である。

Ⅲ　器肉1㎝を計り、細かなクシ目が深く施されている。

以上細かく分類したが、出土量が極めて少ないため表面上の観察と終ってしまったが、全体に見ると形式としては、朝顔式と円筒式に分けられ、円筒状のものに比べ朝顔式のものの方がきめ細かな手法がとられている。又、筒状のものの中にも2種類見られ、器肉のやや薄いものと焼成・胎土の粗雑な厚手のものとがある。朝顔式のものは内外面ともにクシ目が施されている。個体数は、朝顔式2点・円筒状のもの4点となっている。（平岡）

石器

木戸台遺跡から出土した石器は総数　点であり、その主なものを示した。時代の判別が困難なものもあるが、第13図1～7を先土器時代、8～14を縄文時代に属するものと考えておきたい。

1．先土器時代の石器（第13図－1～7）

ナイフ形石器（第13図－1）　安山岩製であり、左側上半部を自然面を利用し、刃部としている。右側縁に重点的にブランティングが施されている。基部にあったバルブは意識的に打ち剝されている。なお、刃部の先端部に使用痕と思われる小さな刃こぼれが認められる。

槍先形尖頭器（第13図－2）　硅岩製であり、全面に調整剝離が施され、断面は凸レンズ状を呈している。また、長さ比べ幅が狭く、細長い形状を呈する。

掻器（第13図－4）　黒曜石製。基部が欠損しているので、長さはさらに1㎝前後増えるであろう。先端部を重点的に調整してあるが、左右側縁にも調整剝離が施されている。バルブは刃部作製時点で打ち剝されている。なお、使用痕と思われる擦痕が裏面、刃部と右側縁の交わり付近に認められる。

掻器（第13図－7）　チャート製。右側縁及び左側縁及び左側縁下半部に重点的に調整が行なわれている。刃部のなす角度は60°～70°近くあるので、削器と用途というより掻器として用いられたのかもしれない。左側縁中央部に凹部が認められる。小剝離が認められるが、調整剝離と考えられるものでないから、使用痕かもしれない。なお、裏面は全体的に刃部を作製した時に剝離が施されたものではなく、原石の時点で剝離されていたものである。

使用痕ある剝片（第13図－5）　チャート製。打面及び側面は自然面であるので、石刻調整

剝片を利用したものであろう。基部に使用痕と思われる剝離が認められる。

剝片（第13図－3・6）　3は黒曜石製であり、6はチャート製である。いずれも自然面が認められているうえ、意識的に調整が施されていないことから、石核調整剝片と考えられよう。

2　縄文時代の石器（第13図・第14図－8～14）

いずれも砂岩製である。

8は石斧であろうか。周囲にまんべんなく調整剝離が施されている。基部に磨耗が顕著であるので、基部付近が刃部であったろう。

9には左側縁及び裏面下部に剝離痕が認められる。左側は意識的に折り取ったものでなかろうか。

10の裏面は下方から剝離されている。また、表面には剝離調整が認められる。意識的に調整が施されている。刃器であろうか。

11の下部に剝離痕が認められるが、不完全であり、刃部を作出する目的をもったものでなかろう。他にも剝離痕が認められるが目的でない。

12は磨石であろうか。側縁を中心に磨耗が認められる。

13・14は中央部に凹みが認められる。凹み石であろう。大半が欠損している。

小括

このように木戸台遺跡出土の石器を概観してみたが、厳密には石器に入れるのに躊躇するものも含んでいる。また、塚の封土から出土したものであり、出土層位も明らかでなく、時代を判別するのに困難なものもある。

先土器時代に属するものには、ナイフ形石器（第13図－1）槍先形尖頭器（第13図－2）掻器（第13図－4）削器（第13図－6）等である。ナイフ形石器は関東ローム層のいわゆるソフト・ロームに食い込んだ状態で出土したものである。これは縦長剝片を素材としたもので、茂呂遺跡・茶臼山遺跡のナイフ状刃器に類似している。千葉県内で類例をみれば、木苅峠Ⅴ・雨古瀬・今島田遺跡と同時期のものであろうか。本遺跡ではこのナイフ形石器以外に土壙内より出土した槍先形尖頭器がある。同時期とするには若干問題がある。この他、砂岩製の石器があるが、既に述べたように縄文時代のものと扱ったが、先土器時代に属するものもあろう。

以上、横芝町木戸台遺跡出土の石器を若干考えてみたが、意をつくせない部分が多い。機会を改めて筆を取ることになっているので、詳細はそれにゆずりたい。（西山）

Ⅴ　マウンド下の遺構と出土遺物

(1)盛土下調査に至る経過

塚盛土構築状態を観察するために設定したA・Bトレンチの調査中、ソフト・ローム直上層中より、明確な焼土の分布を認めることができた。Aトレンチ西隅においては広く焼土が分布し、Bトレンチ南側では数カ所に点在した形で焼土が分布していた。また盛土中より、縄文時代早期の条痕文土器片も多数検出され、これらの焼土がファイヤー・ピットであろうと考えら

れた。加えて、盛土中からは、無土器時代から歴史時代に及ぶ多種の遺物も検出され、複合遺跡であることが判明した。

今回調査した塚に近接して、前方後円墳1基，円墳1基があり、これらの墳丘形成のためにかなりの量の土が移動し、その後、塚構築によって塚周辺ではハード・ローム層中まで削平されていた。このため、調査にあたって、盛土下にグリッドを設定し、発掘を行なった。

以下、各時代ごとに調査結果の概略を述べることにする。

(2)縄文時代

盛土下の調査によって検出された縄文時代の遺構は、早期の炉穴42基、同期の土壙7基であった。他にピットが検出されているが、遺物の伴出がなく時期不明である。また、旧表土層中から、後期中葉の土器が若干出土しているが、後期の遺構は検出されなかった。

検出された炉穴は、1号・2号・7号炉穴の3基を除いて他は全て相互に切合いをもっており、複合関係からみて、概ね6つの群に分けられる。西からⅠ～Ⅵ群とすれば、

Ⅰ群：ソフト・ローム面において、全面が焼土で覆われている感を呈していた。あたかも方形の火災住居址の覆土のようであり、細かくセクション・ベルトを残して掘り下げたところ、炉穴の複合であった。ここではⅠ群として一括して捉えたが、小規模な群の集合したものであろう。

Ⅱ群：14号土壙を中心として、その集中がみられる。14号土壙底部からは、焼土が連って2ケ所検出されたが、土壙覆土中から焼土は確認されていないので、土壙より古い炉穴と考えられよう。また土壙底部からは、条痕文土器2個体分が検出されている。

Ⅲ群：Ⅱ群の東側に位置し、2基の炉穴と2基の土壙及び2穴のピットからなる。

Ⅳ群：（E－2・3）グリッドにあり、5基の炉穴と2穴のピットからなる。

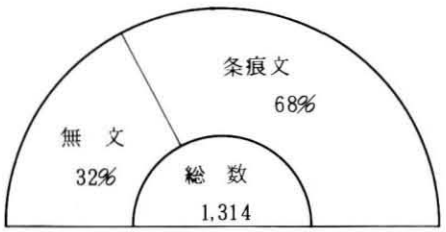
Ⅴ群：（E・F－1）グリッドにあり、5基の炉穴と1基の土壙、1穴のピットからなる。調査区東端にあたり、全容を検出することができなかった。

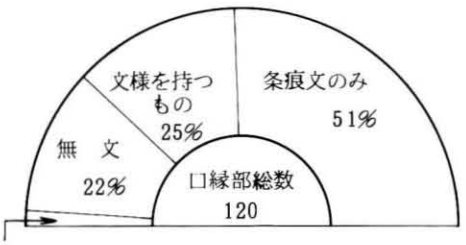
Ⅵ群：切合関係を持たない炉穴を本群とした。1号・2号・7号炉穴からなる。

以上のように群別される。

また、炉穴の平面形は、円形及び楕円形（卵形を含む）であり、規模も80cm内外でほとんど変わらない。そして、"足場"を有するといわれる長楕円のプランをもつものは検出されなかった。そして、断面形においても大きく分けて、底部が平坦でなく緩い傾斜をもつ"皿状"のものと、平坦な底部をもち、はっきりした掘り込みを有する"ナベ底状"のものとに分かれる。そしてナベ底状の炉穴は他の炉穴とはある程度区別して構築されているようである。40号炉穴においては、壁面及び壙底を敲いて作ってあるような痕跡が認められ、焼土の堆積も厚かった。

本遺跡で検出された条痕文土器は1314点でありその約$\frac{1}{3}$程は炉穴出土である。時期的には野島式土器が主体を占めており、鵜ケ島台式・茅山上層式も見られる。（湖口）





F P.No.	平面図	断面図	底部の形態	規模(cm)	深さ(cm)	焼土の状態		備考
						厚さ(cm)	規模(cm)	
1	卵形	皿状	ほぼ平坦	54×40	13	4	—	
2	不整楕円形	なべ底状	やや丸味をもつ	66×66	17	3	—	
3	楕円形	〃	ほぼ平坦	100×80	15		65×60	
4	〃	〃	〃	60×(?)	24		50×45	
5	〃	皿状	傾斜をもつ	80×60	20	4	40×40	
6	〃	〃	ほぼ平坦	100×70	25	0.5	50×45	
7	円形	〃	〃	85×85	17	7	50×40	
8	卵形	2段	〃	110×75	25	6	30×?	
9	楕円形	皿状	凹凸あり	65×(55+α)	25	15	50×40	
10	円形	なべ底状	ほぼ平坦	100×90	20	10	75×60	
11	楕円形	—	—	—	—	—	—	
12	〃	なべ底状	凹凸あり	75×60	30	8	55×40	
13 a b	〃(?) 〃	〃 皿状	ほぼ平坦 〃		23 23	8 4	35×30 45×32	
14	〃	〃	凹凸あり	90×80	36	10	45×40	
15	円形	〃	ほぼ平坦	65×55	7	3(?)	50×45	
16	〃	〃	丸味をもつ	60×60	16	5(?)	50×50	
17	楕円形	〃	傾斜をもつ	80×60	15	7	55×38	
18	〃	〃	ほぼ平坦	50×40	12	6	35×15	
19	円形	なべ底状	丸底を呈する	65×(60+α)	28	8	35×(25+α)	
20	〃	皿状	ほぼ平坦	80×65	18	3	55×40	
21	楕円形	?	傾斜をもつ	100×75	25	10	65×40	
22	〃	皿状	やや丸味をもつ	80×60	20	9	47×27	
23	〃(?)	浅い皿状	ほぼ平坦	65×(30+α)	10	3	43×(36+α)	
24	〃(?)	なべ底状	やや丸味をもつ	65×(65+α)	12	3	50×45	
25	長楕円形	—	—	60×(100+α)	—	—	30×20	
26	円形	皿状	ほぼ平坦	70×60	11	3	40×35	
27	楕円形	なべ底状	やや傾斜をもつ	90×70	27	15	65×?	
28	ほぼ円形	皿状	ほぼ平坦	55×(40+α)	6	3	40×40	

P.P.No.	平面図	断面図	底部の形態	規模(cm)	深さ(cm)	焼土の状態		備考
						厚さ(cm)	規模(cm)	
29	不明	皿状	凹凸あり	(65+α)×(25+α)	8	8	(55+α)×(20+α)	
30	〃	〃	〃	(50+α)×(20+α)	9	9	(45+α)×(10+α)	
31	ほぼ円形	〃	ほぼ平坦	75×65	11	10	60×60	
32	楕円形	〃	〃	40×30	18	6	28×20	
33	円形	〃	やや丸味をもつ	65×55	14	14	50×35	
34	〃	〃	〃	(60+α)×(50+α)	10	6	55×45	
35	楕円	なべ底状	ほぼ平坦	67×(70+α)	35	20	45×(50+α)	D14に切られている
36	〃 ?	〃	やや丸味をもつ	55×?	40	17	52×33	
37	円形	〃	ほぼ平坦	45×42	45	12	45×42	
38a	〃	〃	〃	—	—	—	56×50	
38b	〃	〃	〃	—	—	—	40×40	
39	楕円	サラ状	〃	90×(50+α)	14	5	55×(35+α)	F.P.(?)
40	円形	なべ底状	〃	100×90	20	8	65×50	
41	楕円?	〃	〃	65×(30+α)	25	20	—	
42	卵形	〃	〃	65×60	20	18	35×30	

(3)平安時代

盛土下に於て、縄文時代早期に伴なう土壙と共に平安時代に推定される土壙墓8基確認された

第1号土壙墓

本遺構は、(A－3)グリッド、4号土壙の南側約3m離れて確認され、北東－南西に主軸を持つ長方形に近い楕円形の土壙である。土壙の内部に土壙を持つ2段土壙であり外部土壙規模は東西径170cm、南北径240cm、内部土壙上面まで－50cmを計り、内部土壙規模は、東西径86cm南北径210cmを計り、ローム上面からの深さは－60cmとなっている。内部土壙の形状は長楕円形であり、西壁は外部と接している。ローム上面より－40cmのレベルで約15cm位の厚さのロームが西壁側、東壁側から検出されており30cm前後の幅を持っている。底部は内部、外部土壙併に平坦でありゆるやかに立ちあがっている。土壙内からの遺物は須恵器（広口瓶）1点が土壙のほぼ中央部より検出された。

第2号土壙墓

(C－1)グリッド、(C－2)グリッドにまたがっており4号土壙の西側約4mの位置本遺跡中最北端に存在する。東西に主軸を持ち東西径210cm、南北径134cmを計り深さは24cmとやや浅い長方形の土壙である。底部は平坦でゆっくりたちあがっており、土壙内からは遺物等は全く検出されなかった。

第3号土壙墓

(B－3)グリッド、(C－3)グリッドで確認され、南側には50cm程離れて4号土壙、北側約1.5m

の位置に13号土壙が存在する。規模は東西径140cm、南北径160cmの不整方形を呈している。北壁側には約35cm前後の幅でテラスがありローム上面より－20cm、底部までは－35cmを計る。底部は凹凸が著しく、なだらかに立ちあがっている。遺構内からの遺物は全く検出されなかった。

第4号土壙墓

本遺構は、(B－2)区、1号土壙の西側2m、2号土壙の東側4mの位置に存在する。形態的に観察すると2号土壙と同様二段土壙である。規模は東西に主軸を持ち径220cm南北径170cmの不整方形を呈するものである。内部土壙は東西径190cm、南北径58cmの舟形状のもので深さ10cmを計りローム上面からは－76cmを計る。内部土壙は北側に掘り込まれており北壁を同一の壁としており、ローム上面より－25cmレベルよりフラスコ状に掘りこまれている。北壁より30cmの位置に東西径140cm、南北径50cmの楕円形でロームブックが内部土壙にかぶさった状態で検出された。レベル的には外部土壙底部と同レベルである。底部は全体的に平坦であり土壙内からの遺物は検出されなかった。

第5号土壙墓

(C－5)区で確認され南側半分を6号土壙により破壊されている。東西径190cm、南北径65cmの東西に長い方形を呈している。深さは約25cm前後の比較的浅い土壙で底部は平坦になっており西側はゆっくり立ちあがるのに対し東側はほとんど垂直に立ちあがっている。充溝土壌は単層である。本遺構分からは底部直上より西側にかたよって玉が3個検出されている。

第6号土壙墓

本遺構は、(C－5)区で確認され、5号土壙の南側壁を破壊して存在する。1号、4号、10号土壙と同様本遺構も二段土壙である。上面で東西径280cm、南北径183cmであり、土壙のほぼ中央部に東西径220cm、南北径80cm深さ－26cmの内部土壙がある。内部の土壙は、東壁側が外部のものに接しているのに対し西側は30cm程度離れて掘り込まれており、壁上部には、厚さ5cm程度で白色の粘土が施されている。底部は比較的平坦でゆっくり立ちあがっており、西側には一部ロームブロックがかぶっている。本遺跡中最大な規模を持ち、形状も他の土壙と比して整然としている。遺構内からの遺物等は検出されなかった。

第10号土壙墓

本遺構は、(A－6)、(B－6)グリッドから確認され、本遺跡の最南端に位置している。東西径208cm、南北径126cmの不整方形で深さ－30cmを計る。本遺構も二段土壙であるが、1号、4号、6号と違い内部の土壙も不整方形である。内部土壙の規模は、東西径160cm、南北径110cmを計る。土壙内上面に東壁側から100×50cmの広さでロームブロックが厚さ10cmで検出された。形状の不整形に比し、底部は、平坦となっており土壙内からの遺物の検出は見られなかった。

第11号土壙墓

(B－3)、(C－3)グリッドで検出され、D－3号の南側50cmの位置に存在する。東西径76cmの

南北径176cmと南北に主軸を持つ長方形の土壙である。ローム上面より－20cmの浅いもので、充満土壌も単純なものである。底部は比較的なだらかで、ゆるやかに立ちあがっており、土壙内からの遺物等は検出されなかった。（平岡）

番　　号	東西径	南北径	深	形　　状	備　　考
D － 1	170	232	－72	楕 円 形	二段土壙 ロームがかぶっている
D － 2	210	134	－24	長 方 形	
D － 3	140	160	－35	不整方形	北側にテラスを持つ
D － 4	220	170	－76	不整方形	二段土壙 ローム検出
D － 5	190	65	－25	長 方 形	D－6と重複 ガラス玉出土
D － 6	280	183	－86	長 方 形	D－5と重複、二段土壙、白白粘土検出
D － 7					
D － 8					
D － 9					
D －10	208	126	－30	不 整 形	二段土壙 ローム検出
D －11	76	176	－20	長 方 形	

土 壙 一 覧 表

土壙内出土遺物

広口瓶（第9図）

第1号土壙墓覆土中より検出された。胎土は砂糸の多いもので重い。頸から上が欠失しているが、おそらくラッパ状に大きく開くものと推定される。色調は灰濁色で肩には釉が厚くかかっていくのが高温のため沸騰して泡状を呈し、色調も朽葉色に近くよくない。整形はうまく、シャープな線を出している。底部はヘラ切りで同心円状を呈し、断面長方形に近い高台がつく。頸部取付は、やはり二段構成をとり新しい。肩と胴は鋭い稜線により画され、この時期の平瓶と相似た形状をとる。胎土や高台の特徴からみて猿投窯産ではなく、美濃あるいは、三河以東にその生産地を求めるべきであろう。時期は十世紀代と思われる。

丸小玉（第6図）

第5号土壙墓の底面より3点検出された。

1. 径1.4cm　厚さ1.2cmの中央に0.3cmの孔があけられている。
2. 径1.3cm　厚さ0.9cmの中央に0.3cmの孔があけられている。
3. 径0.9cm　厚さ0.6cmの中央に0.2cmの孔があけられている。

盛土裾部出土の須恵器（第18図）

長頸瓶

焼成、胎土ともに良好、口縁と胴部以下を欠失している。ろくろ水挽きによりシャープな線を出している。頸部内側はろくろ挽きの際の指痕がよく残っている。色調は淡い赤褐色を呈し釉は肩全面と頸部の片側にかかっており、肩の釉は高温のため濁っている。おそらく自然釉であろう。成形は、頸部と肩部の取付けが、二段構成をとっており技法的には新しい部類に入る。十世紀代とみてよく、おそらく愛知県猿投窯産であろう。ただ肩と胴の接合部に稜があり、そこから剝離しているが、この時期は、胴が丸く稜のあるものは珍らしいと思われる。それと頸の陰刻文のあるのも稀有の例で特筆すべきであろう。

小括

調査の結果、8基の土壙が検出された。遺物の出土量は、きわめて少なく、第1号土壙（須恵器1点）、第5号土壙（玉3点）より出土したのみである。これら土壙の形体及び特徴について述べてみた。土壙の形体は3類に分類できる。

Ⅰ類　隅丸長方形プランを呈し、やゝなだらかな壁の立ち上がっているもの。第2号、5号土壙。

Ⅱ類　プランはⅠ類と同じ隅丸長方形を呈し、その規模は、170cm～180cmの大型なものである。また土壙内には、中程もしくは底部近くに、階段上のテラスがみられ、堆積状態はテラスの周囲及び中程にロームブロックが検出され、自然堆積ではなく意識的に埋土したものと思われる。第1号、4号、6号土壙。

遺物は、2基の土壙より検出された。第1号土壙では、広口壷（口縁部を欠く）が覆土上部より出土した。第5号土壙は、底面より2点出土した。第1号土壙より出土した広口壷は、十世紀に比定されるものである。次に土壙の性格については、規模及び堆積状況から、人骨は検出されなかったものの、いずれも土壙墓的な色彩が強く、特に第Ⅱ類に分類した土壙の類例は佐倉市星谷津遺跡（注1）をあげることができる。（平岡）

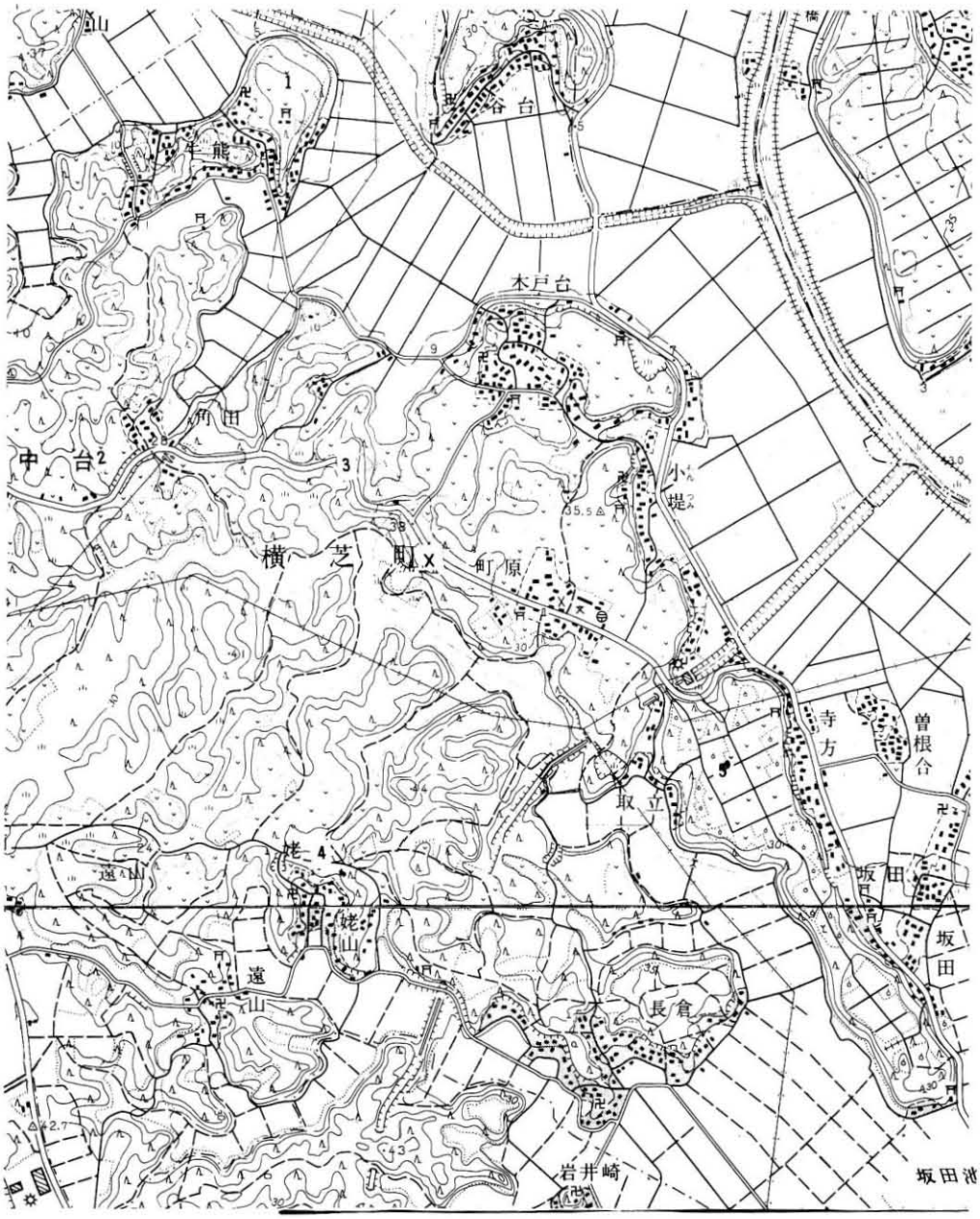
注1、鈴木道之助、他「佐倉市星谷津遺跡」　1978　千葉県文化センター

Ⅵ おわりに

発掘調査は、山武農業協同組合の事業所建設に伴って、行政調査を昭和　年10月１日より11月20日まで実施した。調査費は、山武農業協同組合及び横芝町教育委員会が負担し、調査は、当所塚１基の発掘調査を前提として行なったが、その後、盛土下より縄文時代早期及び中世土壙が多く検出され、それに伴い調査経費は塚１基のみの予算の為に、盛土下の遺構の調査は、調査員各位の持込み経費により行なった。また整理及び印刷費は予算内でまとめたもので、今回発表するに至らなかった資料、不充分な記述については追って明らかにしていく所存である。

最後に、本稿を草するにあたり、千葉県教育庁文化課、西山太郎主事、古内茂主事、流山郷土史料館、山田友治氏、横芝町文化財審議委員会、伊藤和男氏には特にお世話になった。また調査員の湖口淳一氏、松井義郎氏、岡田弘氏、大賀健氏には、無理な調査及び整理をお願いした。巻末ながら記して深く感謝の意を表し、御礼申し上げたい。（平岡）

挿　　図

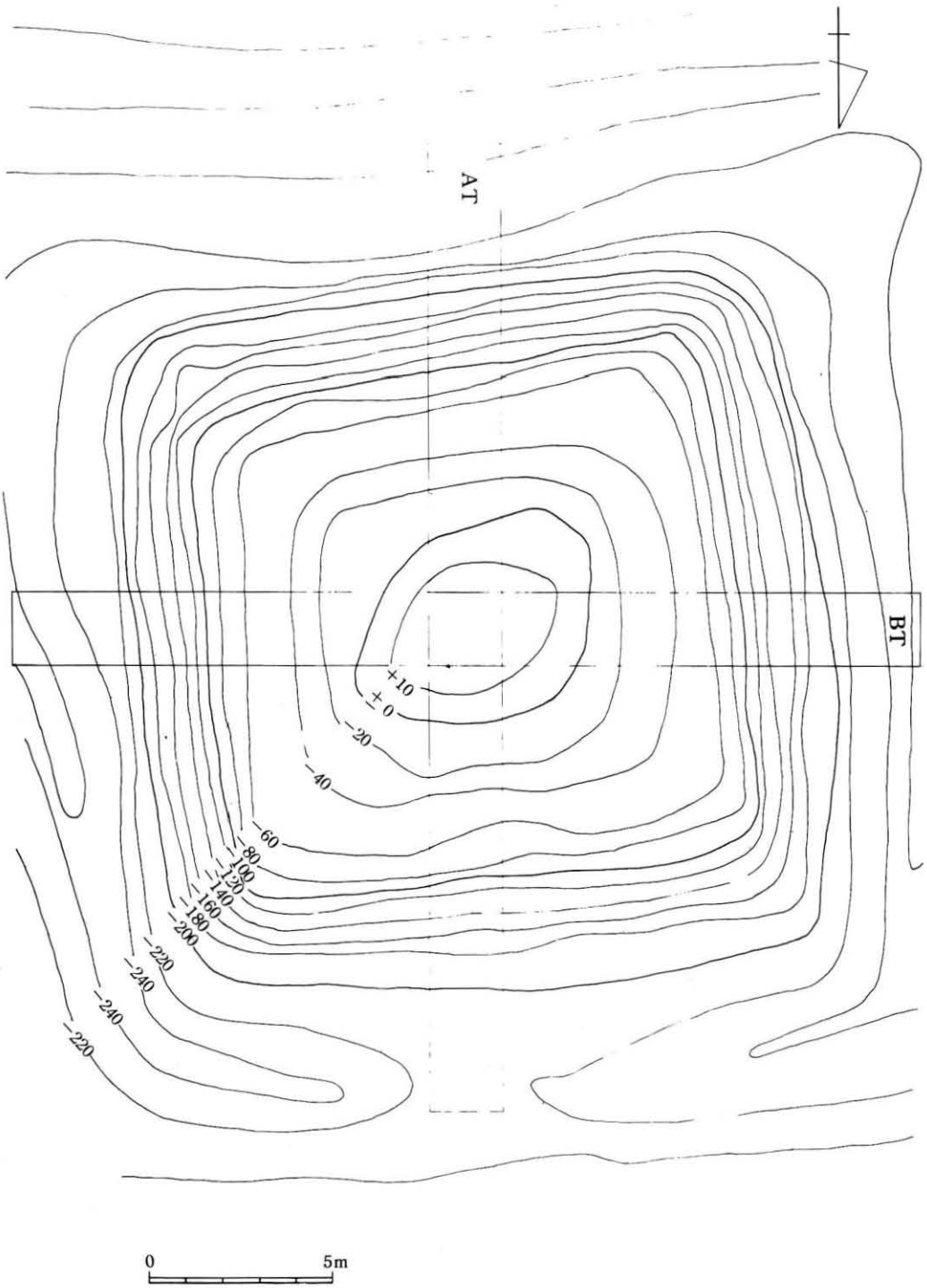


1:25,000　多古

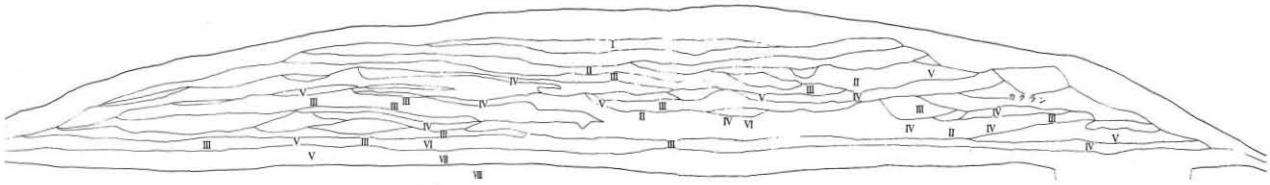
500m　0　500　1000　1500

X 木戸台遺跡
1 牛熊貝塚
2 角田貝塚
3 木戸台貝塚
4 姥山貝塚
5 取立古墳群

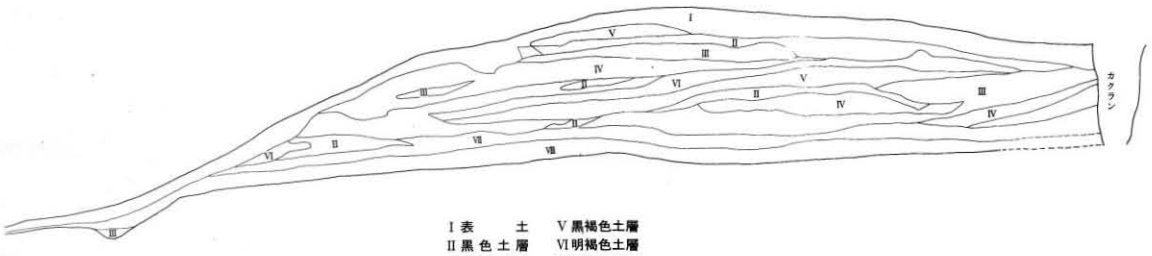
第1図　遺跡の位置



第2図　塚平面図



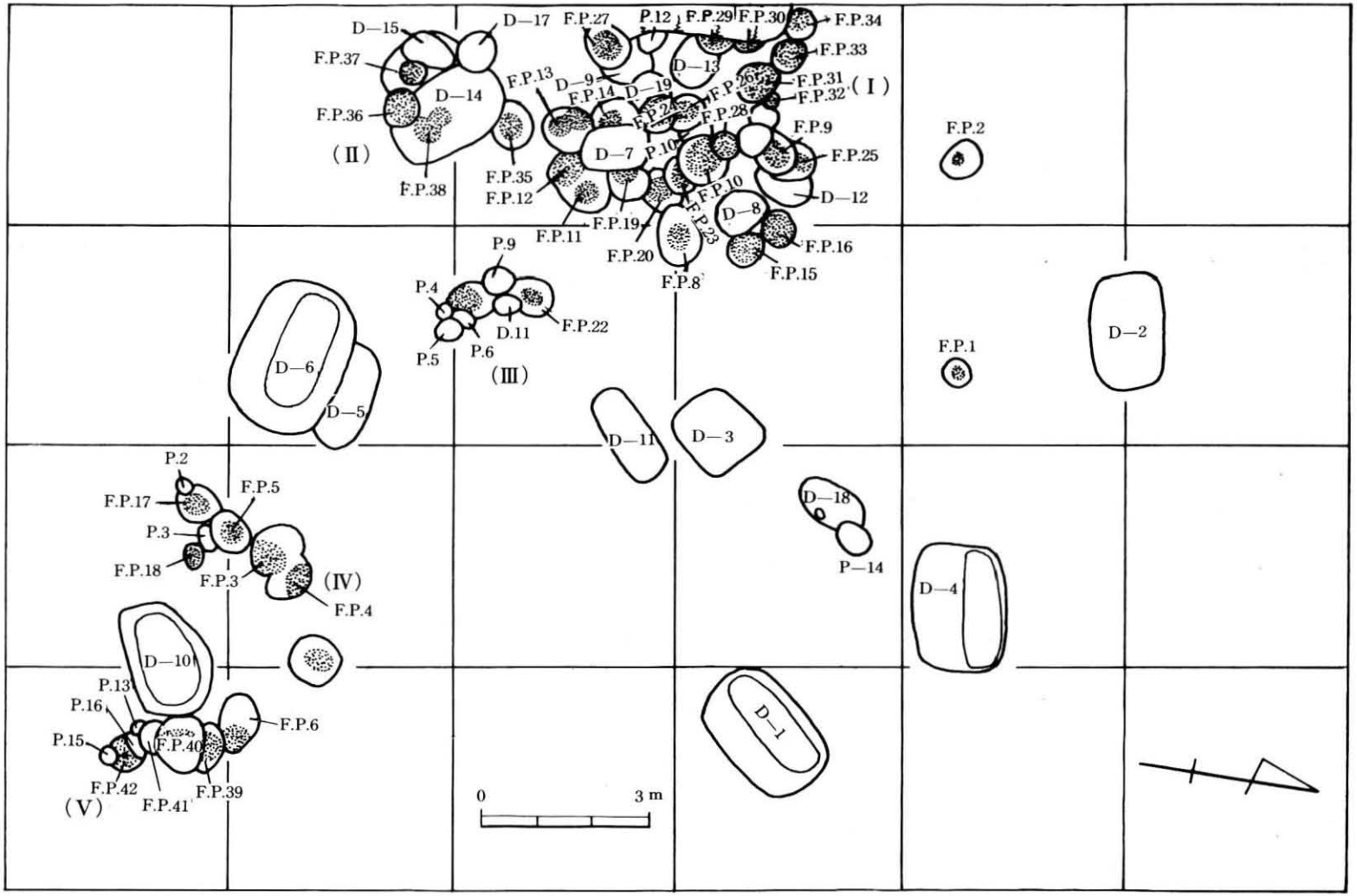
0 2m



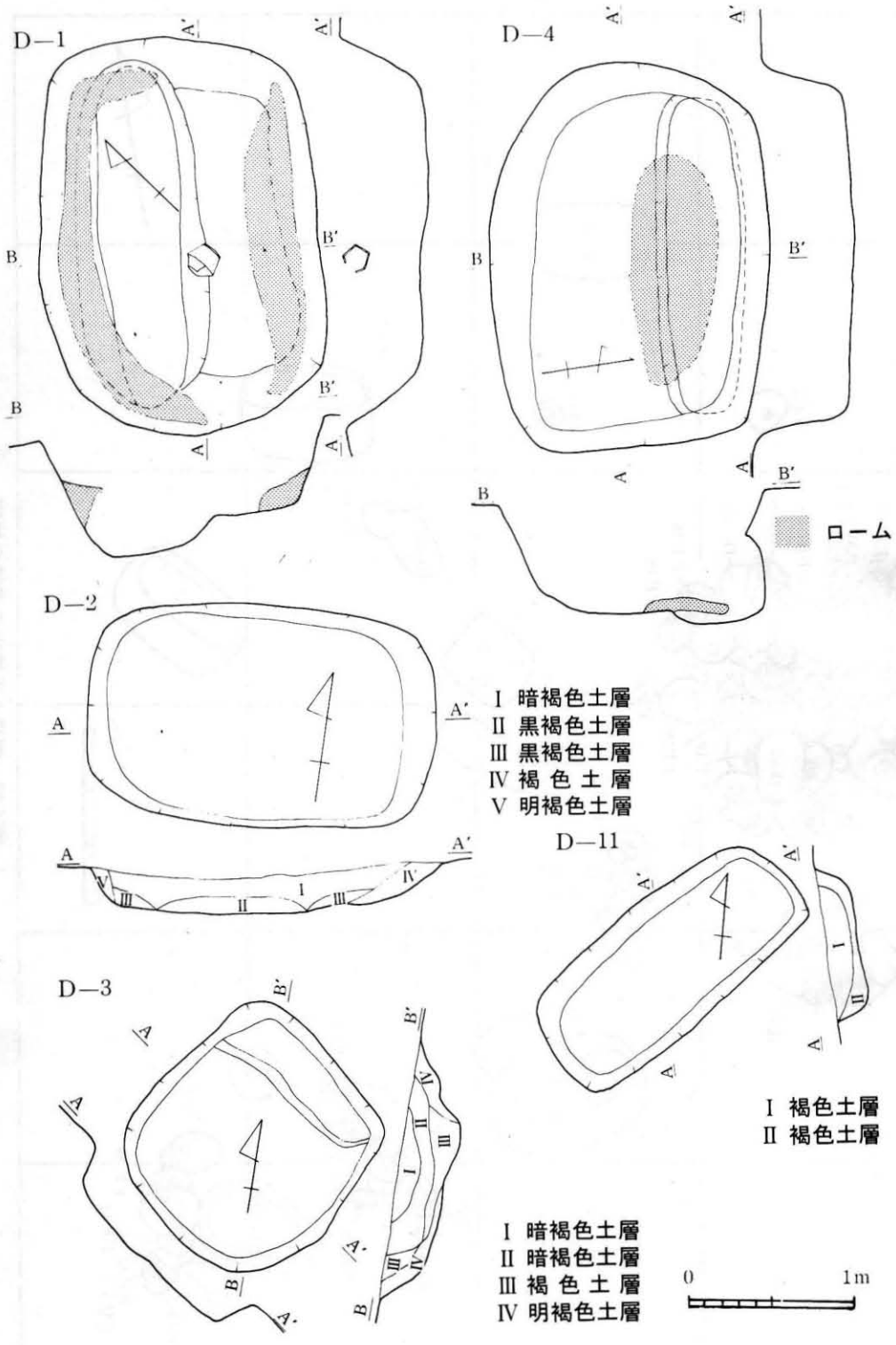
0 2m

Ⅰ表　　土　　Ⅴ黒褐色土層
Ⅱ黒 色 土 層　　Ⅵ明褐色土層
Ⅲ暗褐色土層　　Ⅶ黒褐色土層
Ⅳ褐 色 土 層　　Ⅷ褐 色 土 層

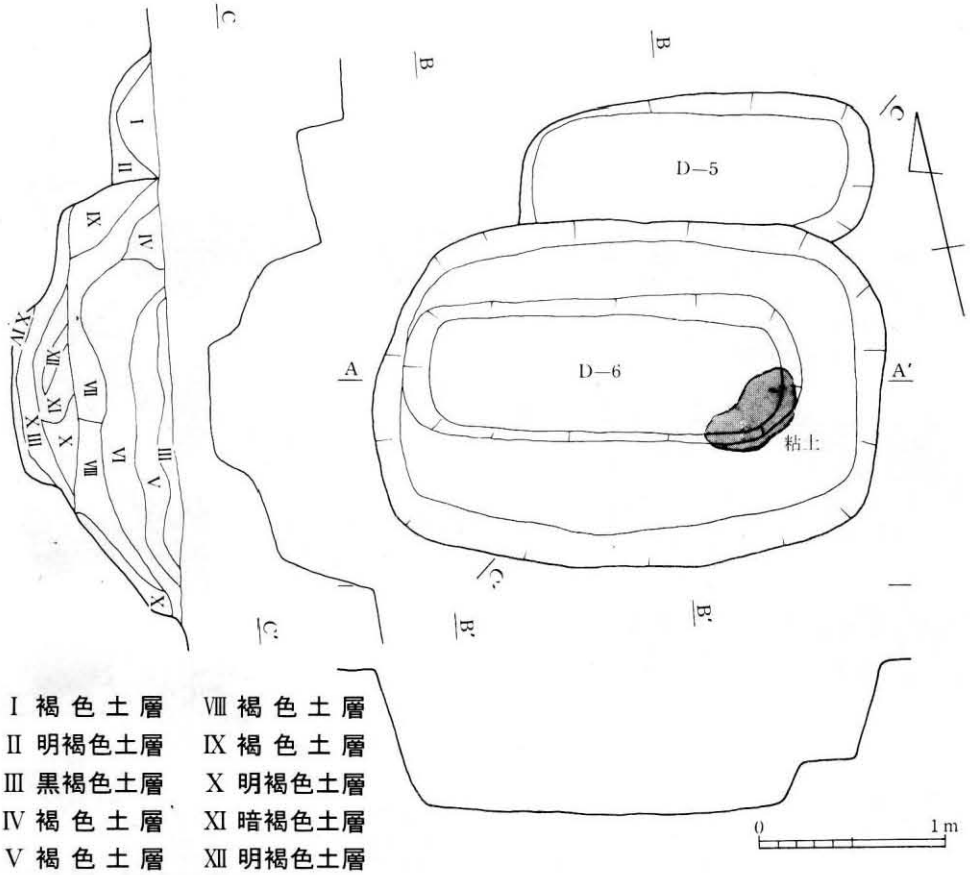
第3図　塚断面図



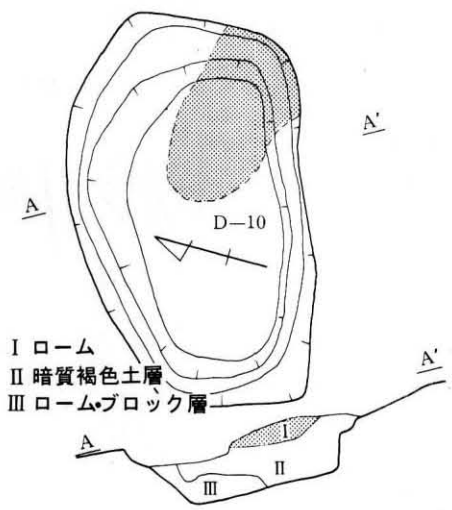
第4図　塚盛土下検出の遺構全体図

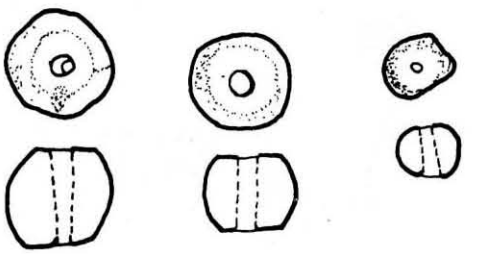

D—1
D—4
D—2
D—11
D—3
ローム
I 暗褐色土層
II 黒褐色土層
III 黒褐色土層
IV 褐 色 土 層
V 明褐色土層
I 褐色土層
II 褐色土層
I 暗褐色土層
II 暗褐色土層
III 褐 色 土 層
IV 明褐色土層
0
1m

第5図　土壙実測図



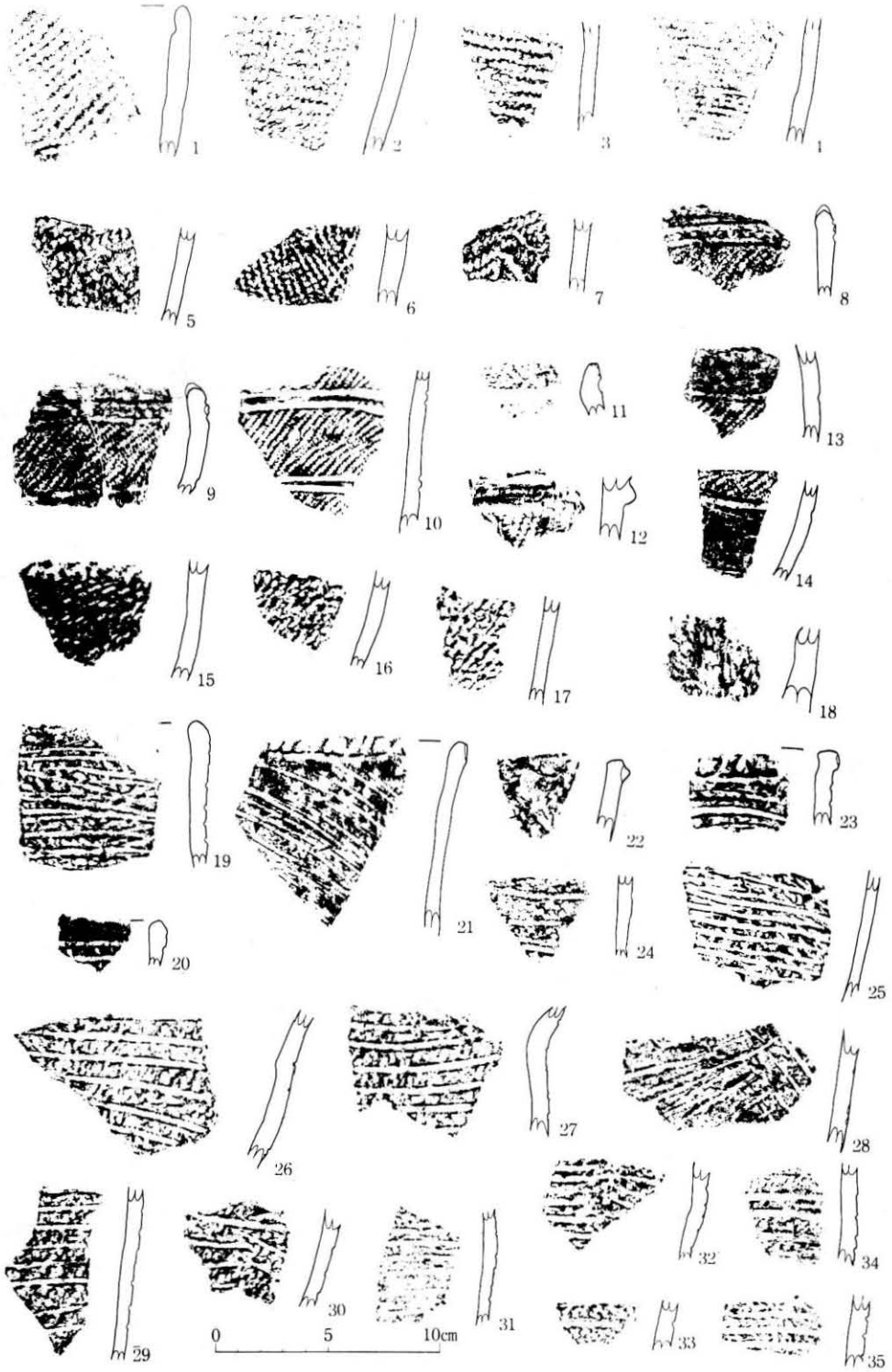
Ⅰ 褐 色 土 層　Ⅷ 褐 色 土 層
Ⅱ 明褐色土層　Ⅸ 褐 色 土 層
Ⅲ 黒褐色土層　Ⅹ 明褐色土層
Ⅳ 褐 色 土 層　Ⅺ 暗褐色土層
Ⅴ 褐 色 土 層　Ⅻ 明褐色土層
Ⅵ 褐 色 土 層　ⅩⅢ 褐 色 土 層
Ⅶ 褐 色 土 層　ⅩⅣ 明褐色土層



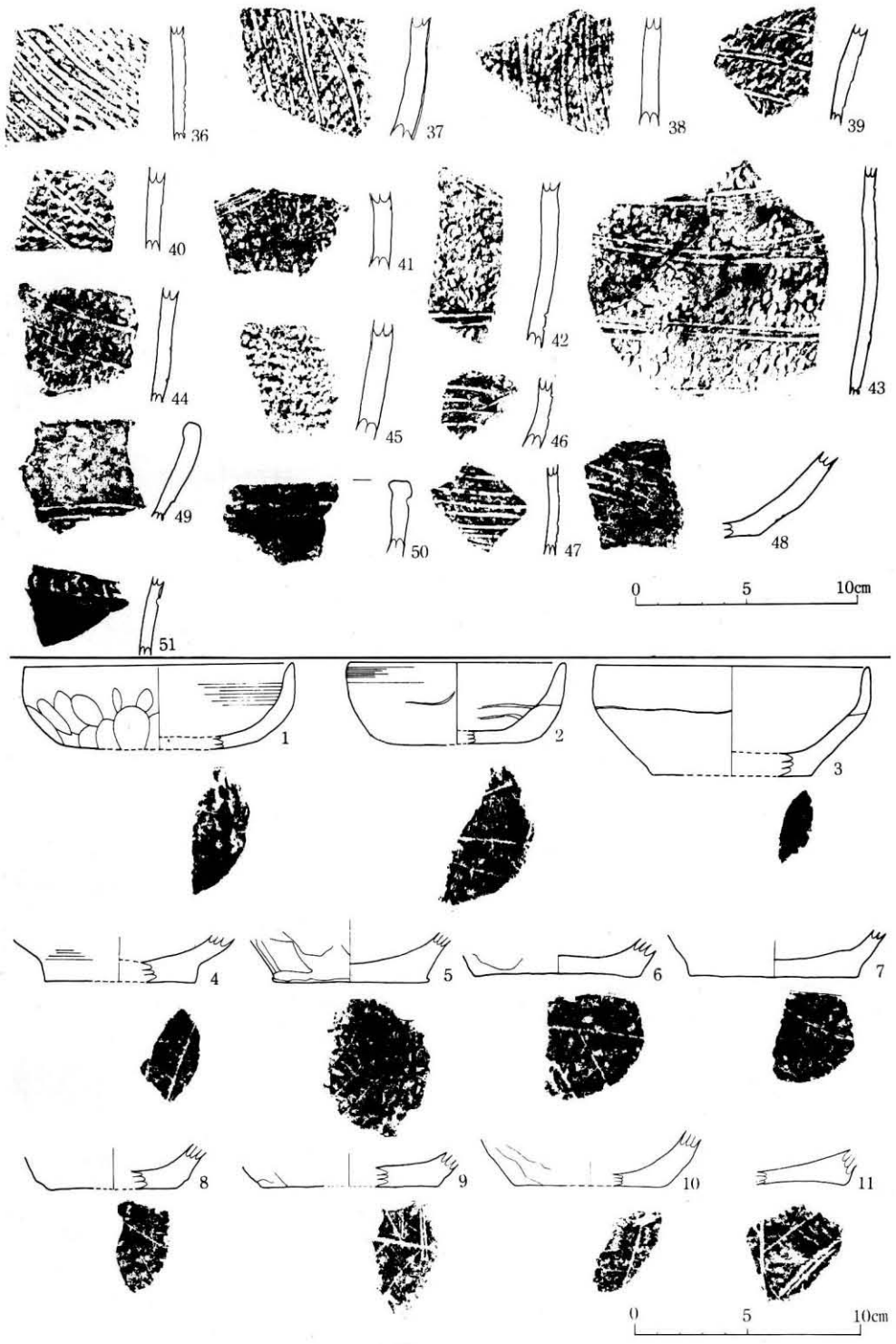


5号土壙出土遺物玉

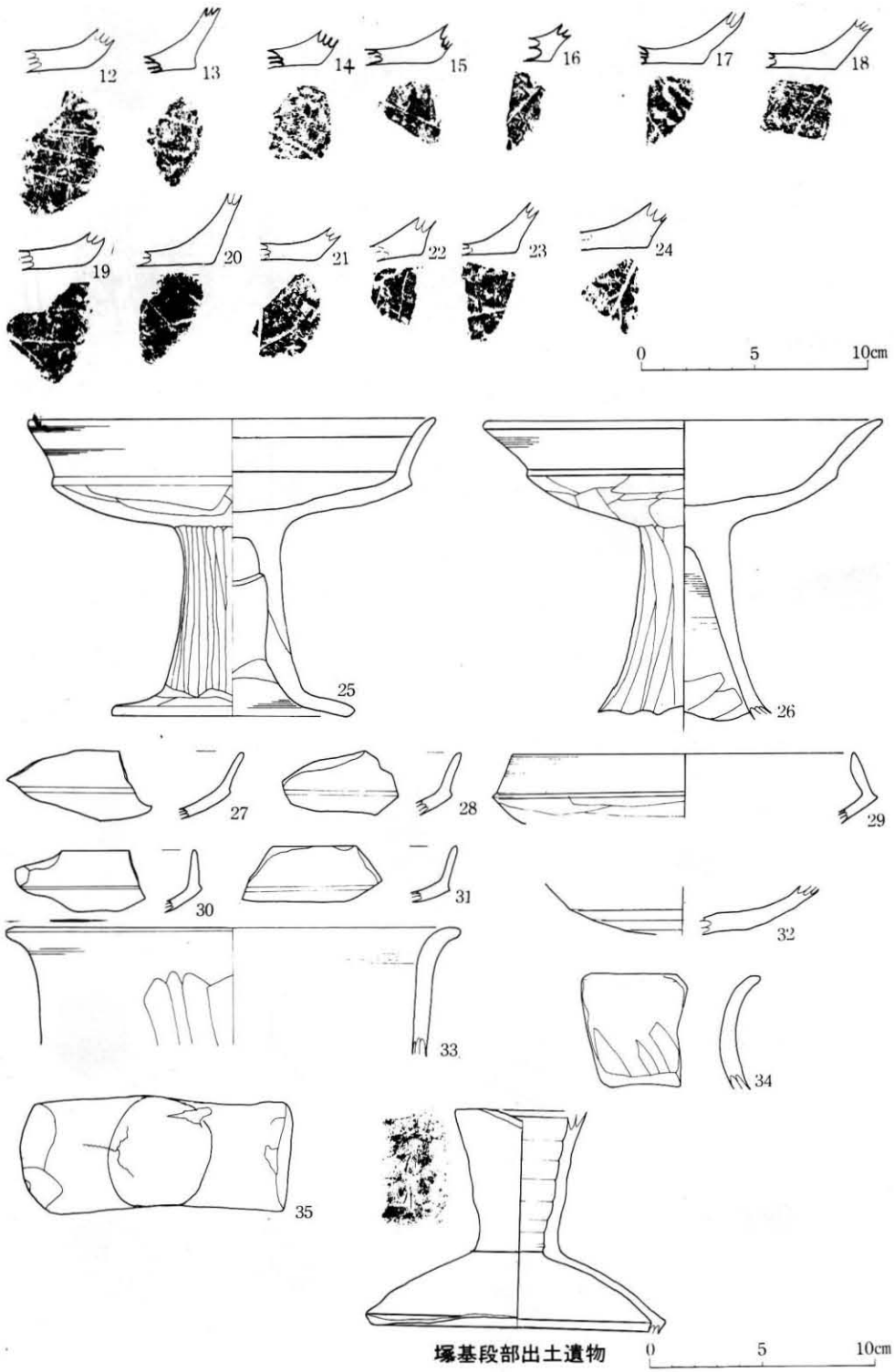
第6図　土壙実測図及び出土遺物実測図



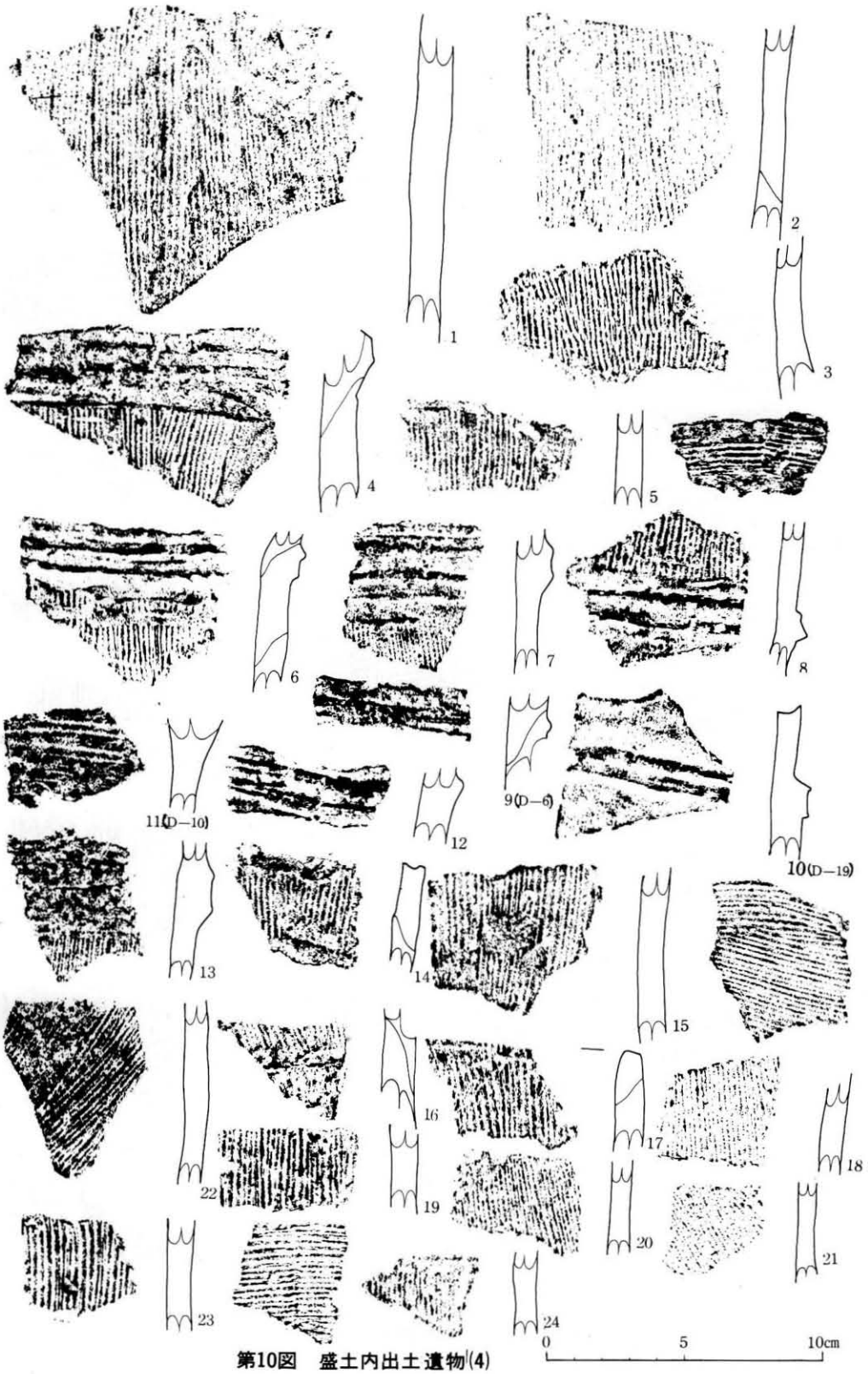
第7図　盛土内出土遺物 (1)



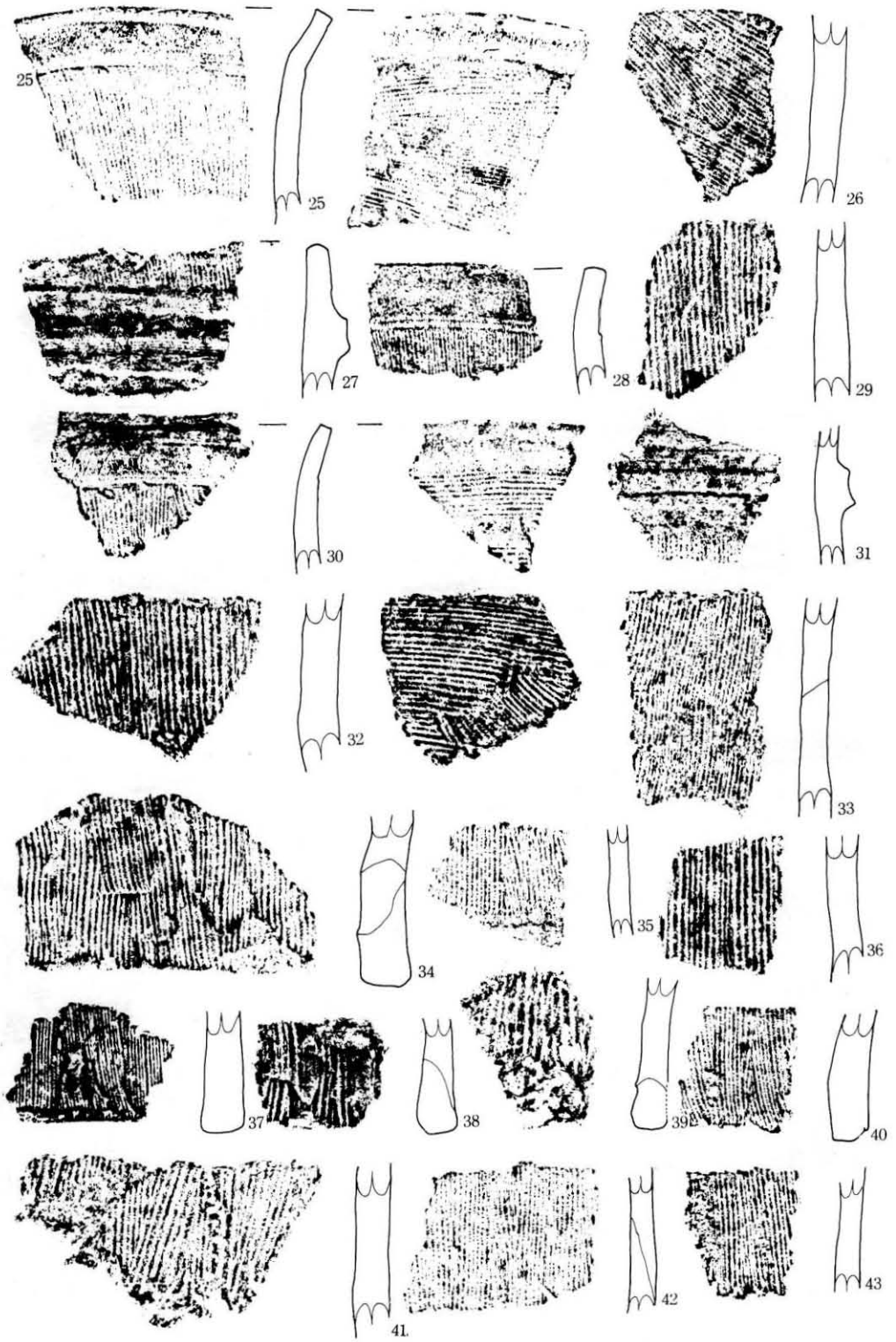
第8図　盛土内出土遺物 (2)



第9図　盛土内出土遺物 (3)

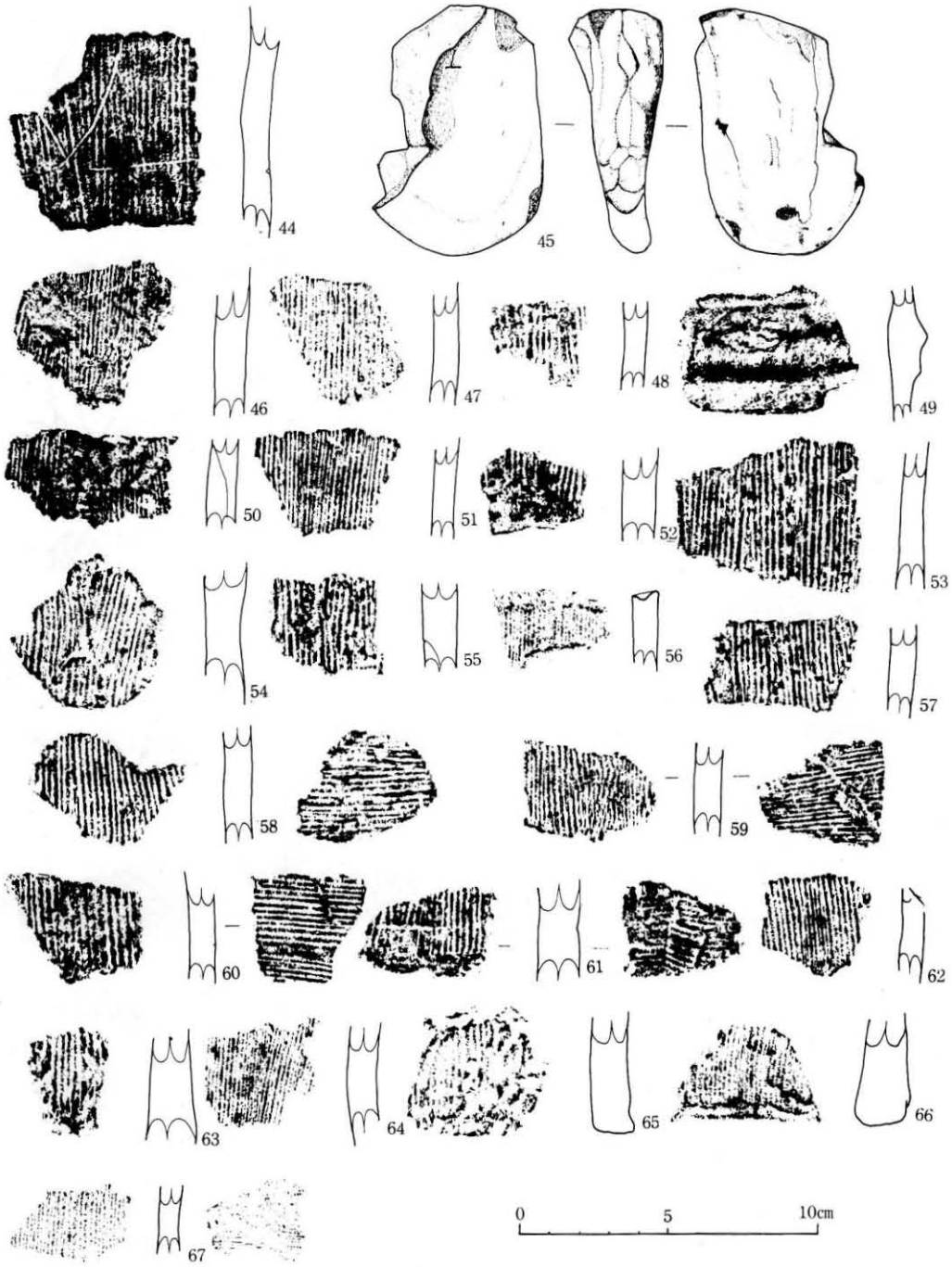


第10図　盛土内出土遺物(4)

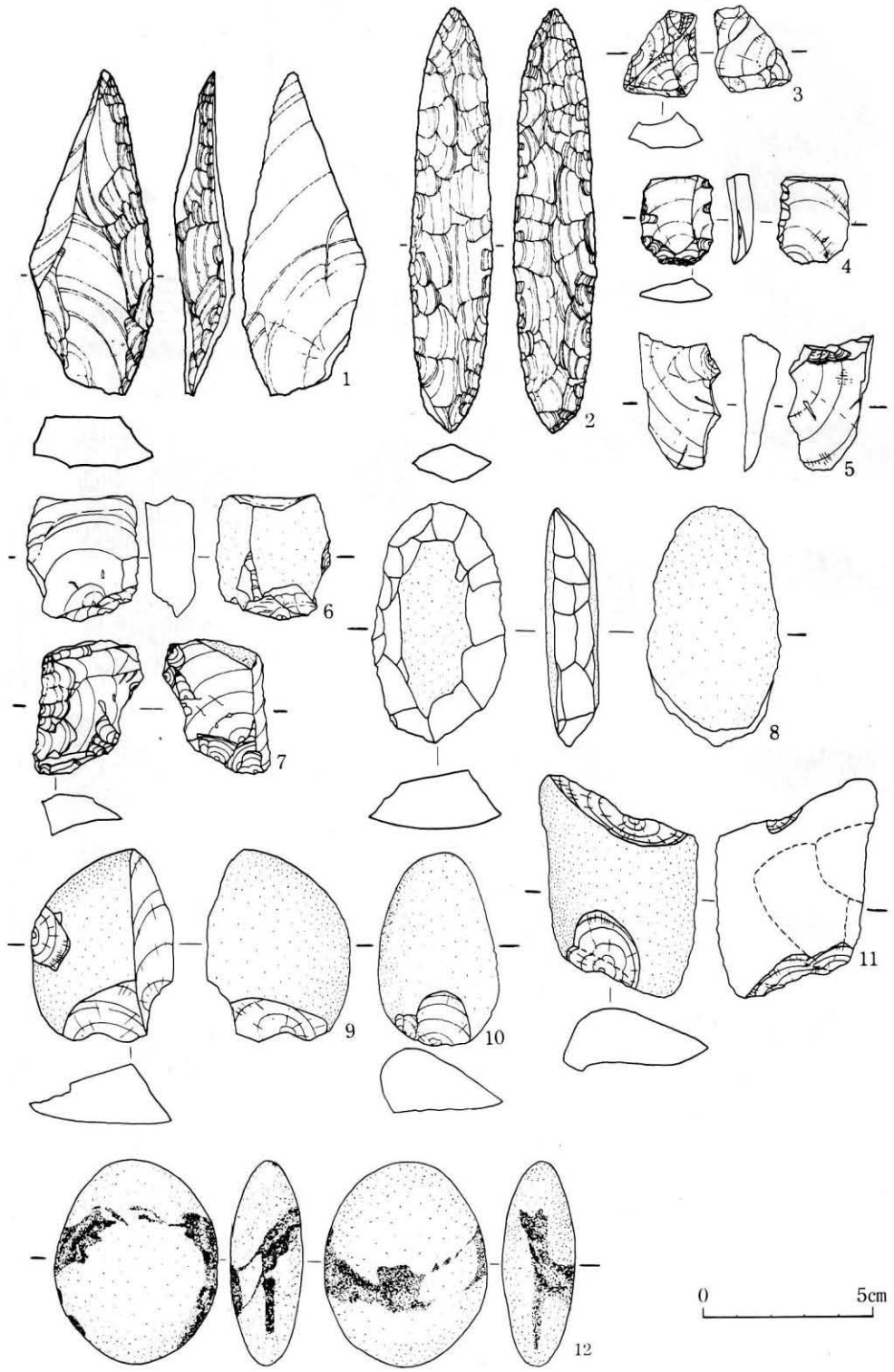


第11図　盛土内出土遺物(5)

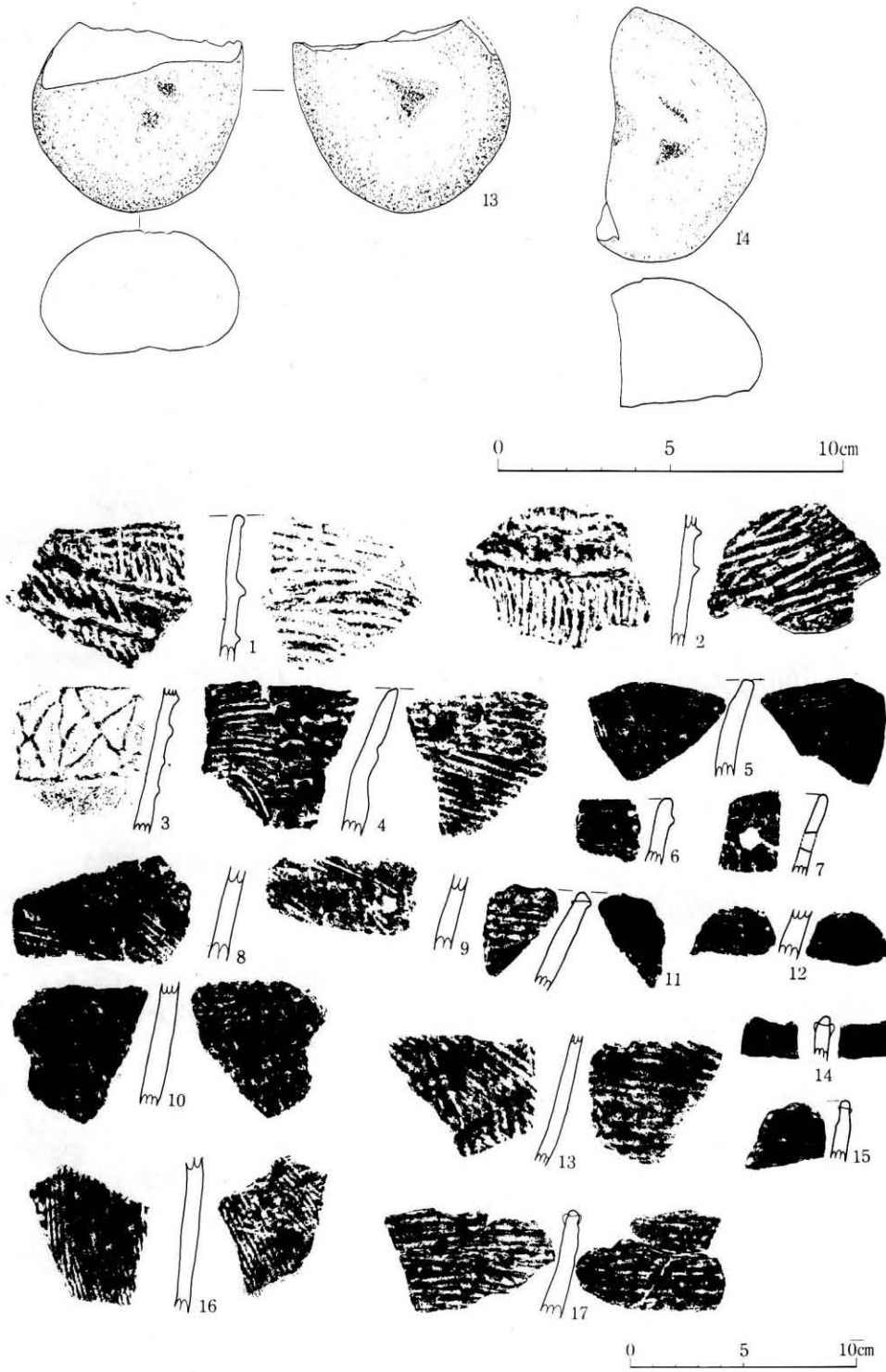
0　5　10cm



第12図　盛土内出土遺物 (6)

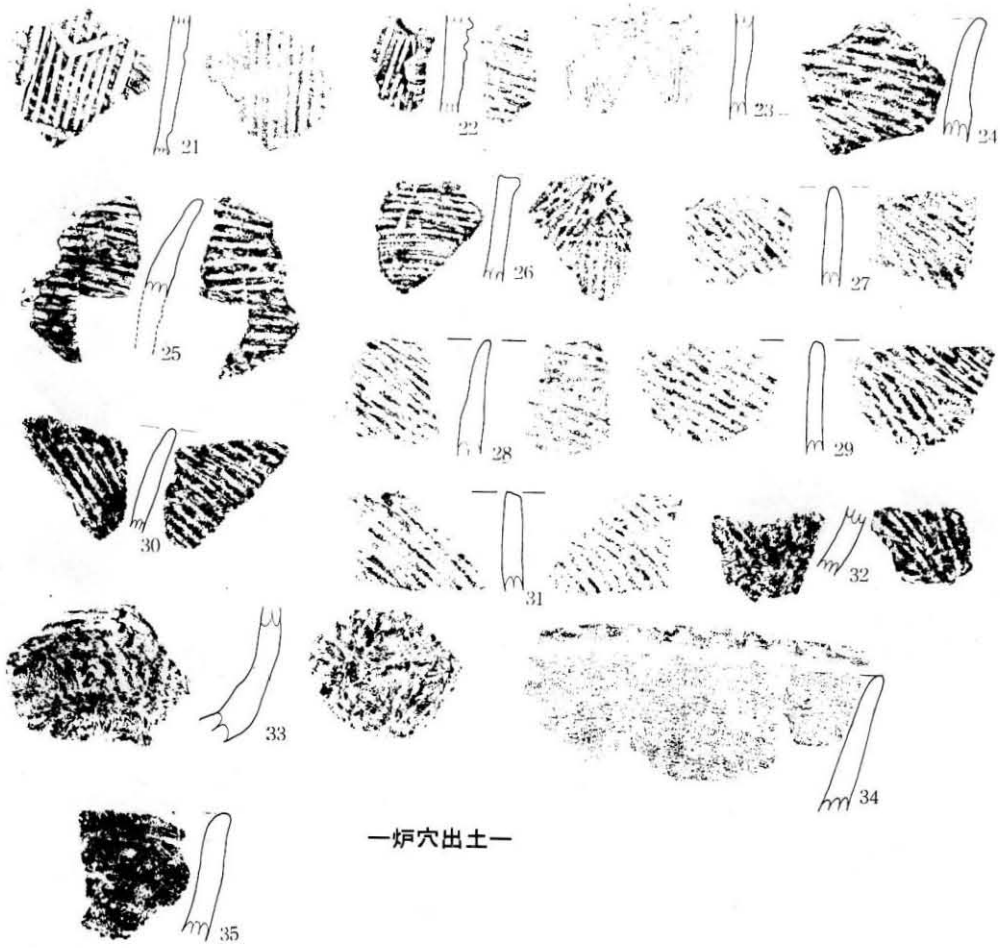


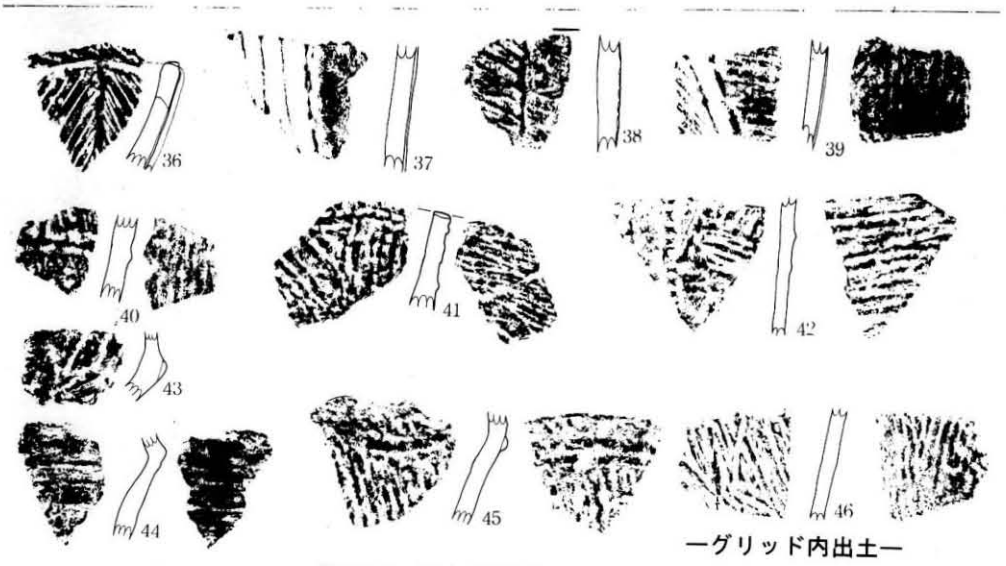
第13図　石　器 (1)



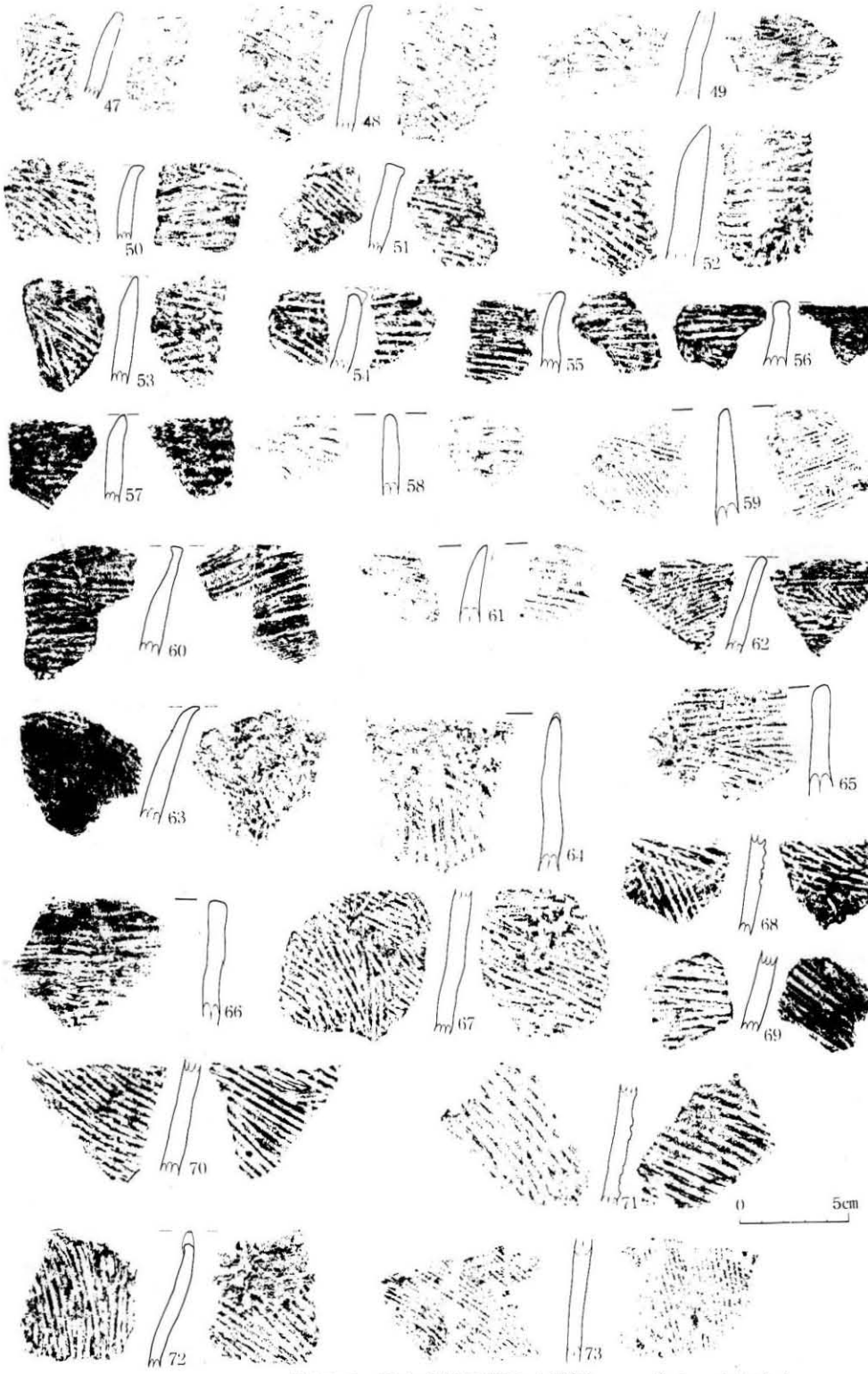
第14図　石　器 (2) 縄文時代早期の土器(1)ー炉穴出土

第15図　縄文時代早期の土器(2)一炉穴出土

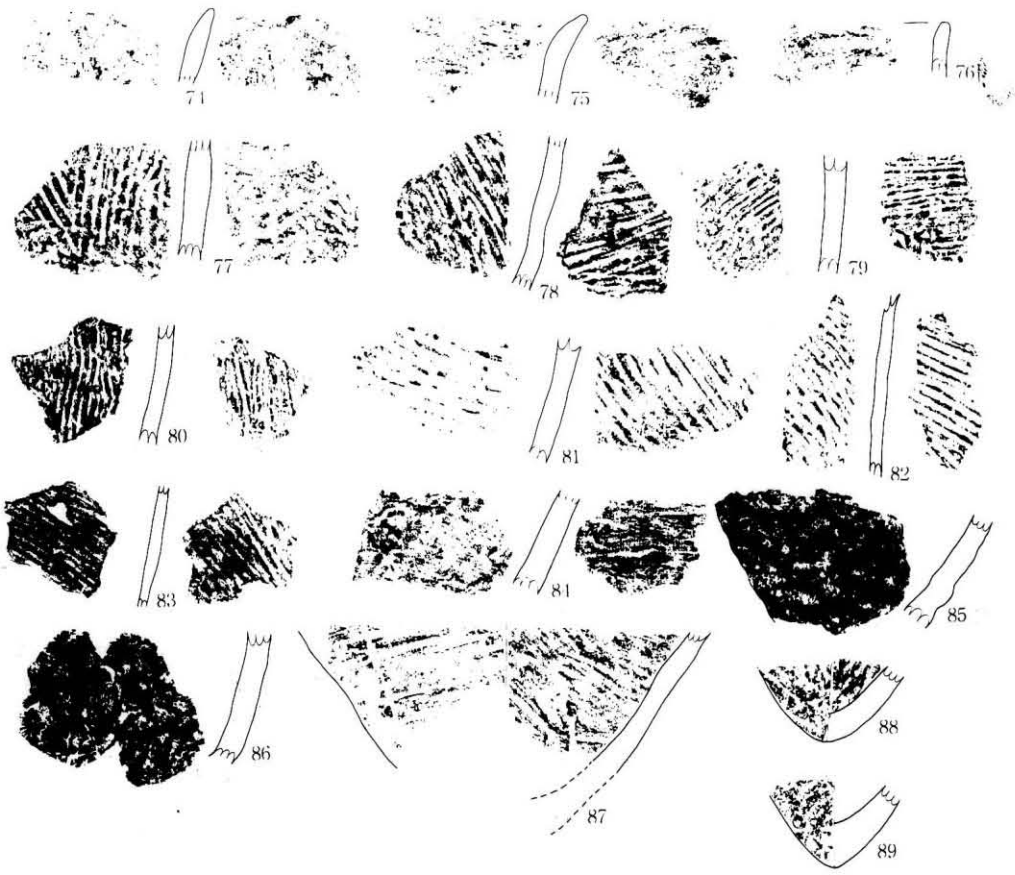




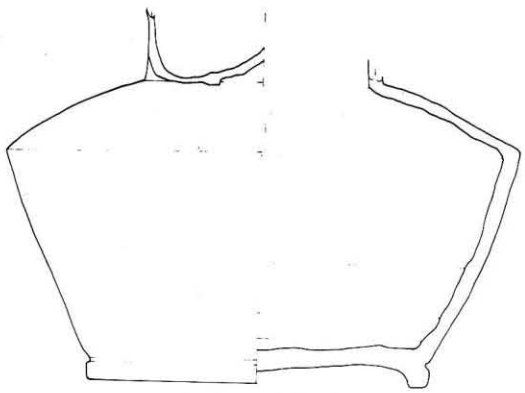
第16図　縄文時代早期の土器(3)



第17図　縄文時代早期の土器(4)　—グリッド内出土—



第18図　縄文時代早期の土器(5)　0　5　10cm

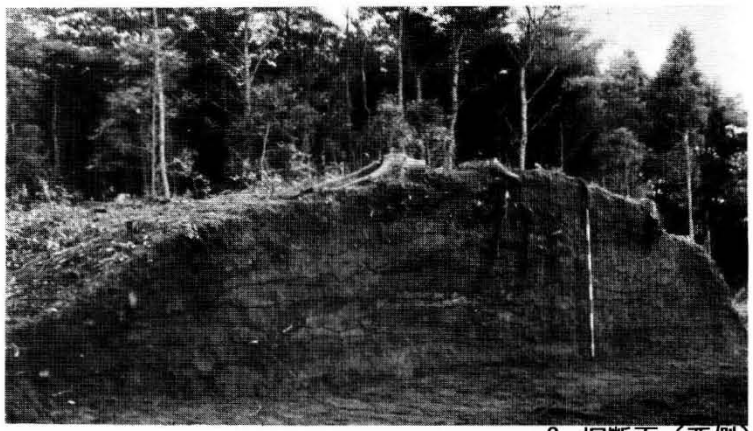


1号土壙出土遺物

0　5　10cm

図　　版

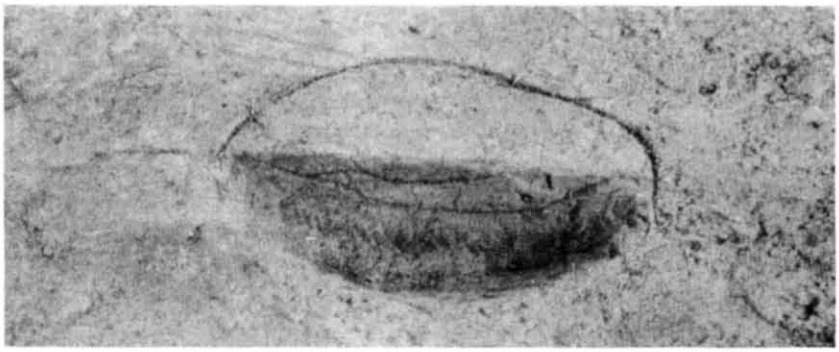
1. 発掘前塚遺存状況



2. 塚断面（西側）

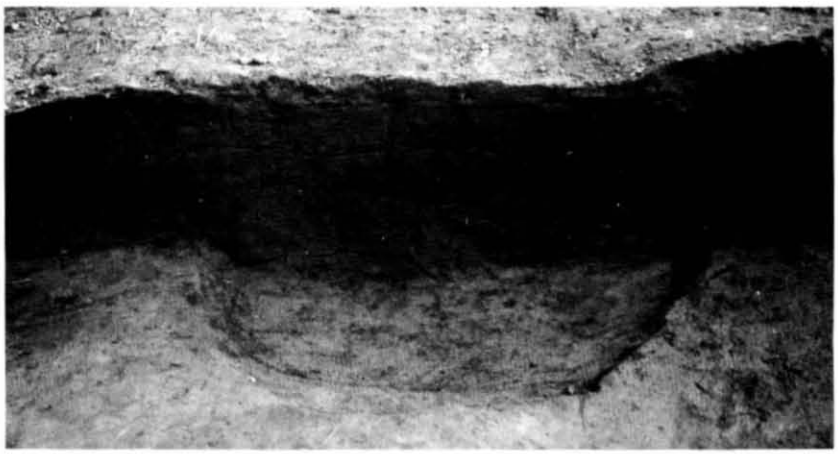
3. 塚断面（西側）

図版 2



1. 第 2 号炉穴

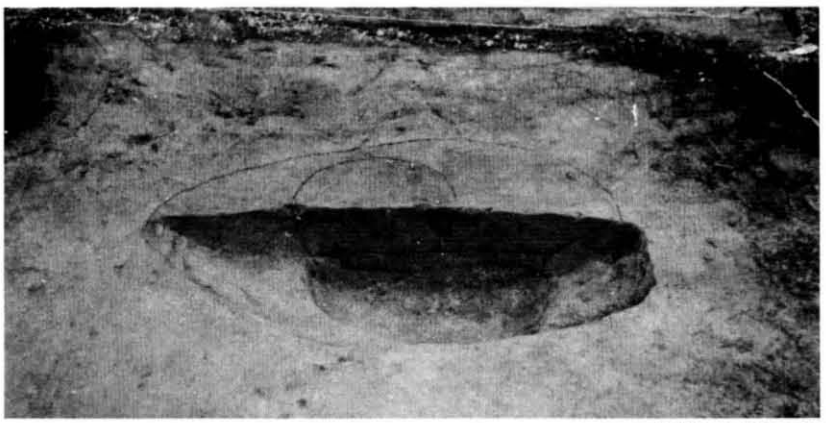
2. 第 3 ～ 5 ・17・18号炉穴、第 2 ・ 3 号ピット



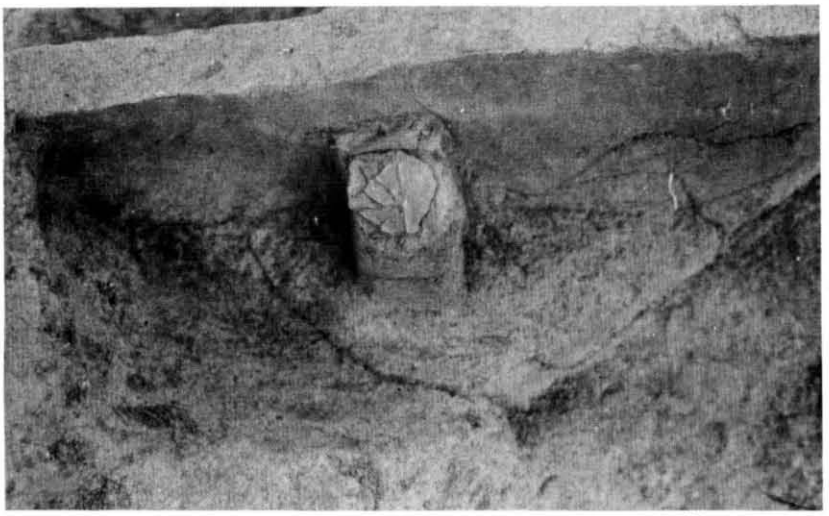
3. 第 6 号炉穴

図版 3

1. 第 7 号炉穴



2. 第 8 号炉穴

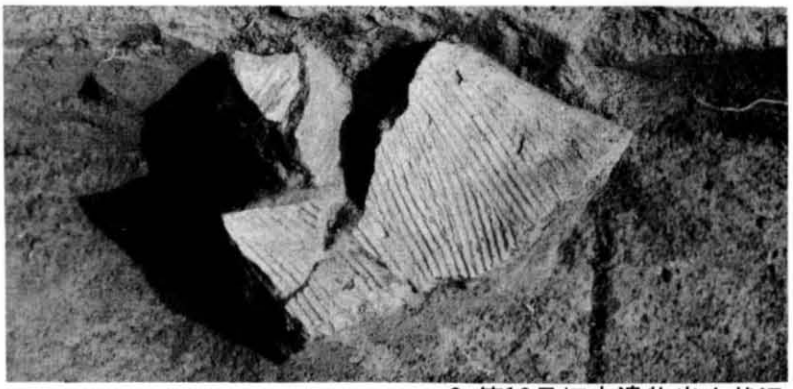


3. 第 9 号炉穴

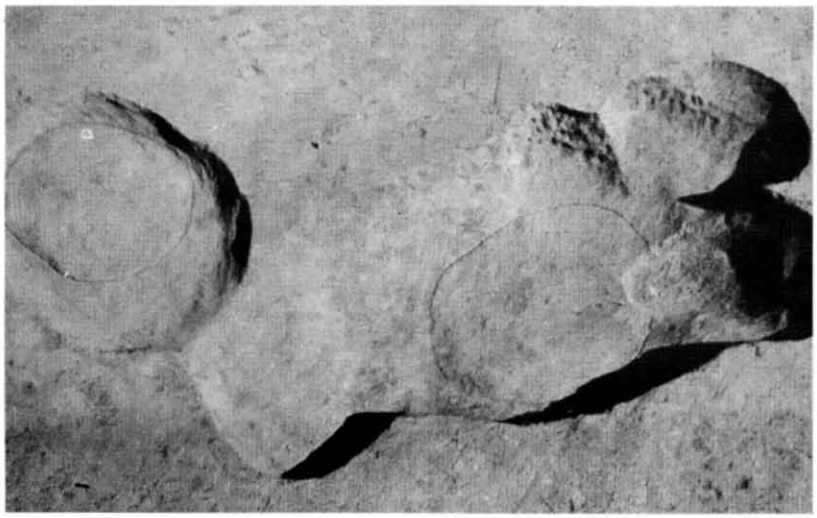
図版 4

1. 第10号炉穴遺物出土状況

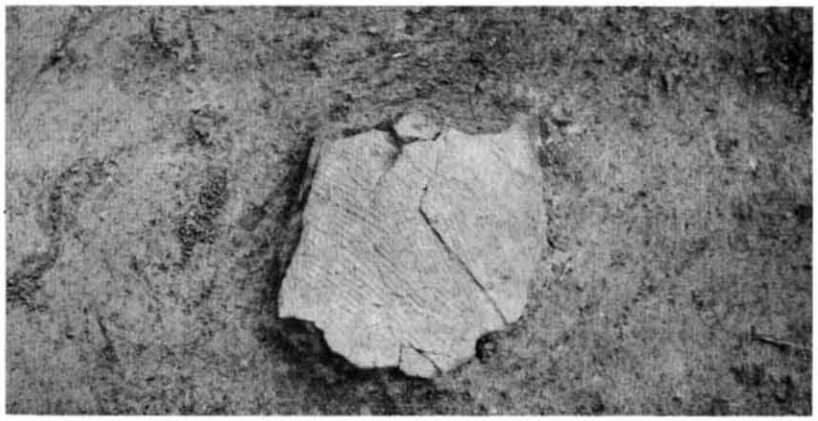
2. 第10号炉穴遺物出土状況



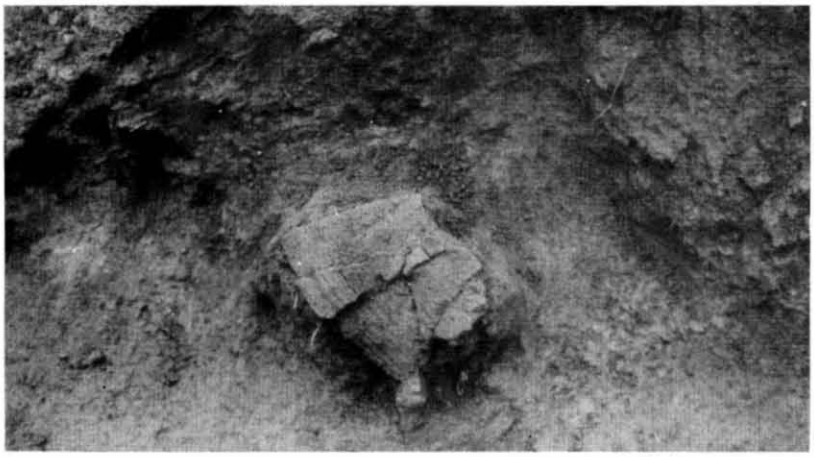
3. 第10号炉穴遺物出土状況



1. 第21・22号炉穴、第 4 ～ 6 ・ 9 号ピット

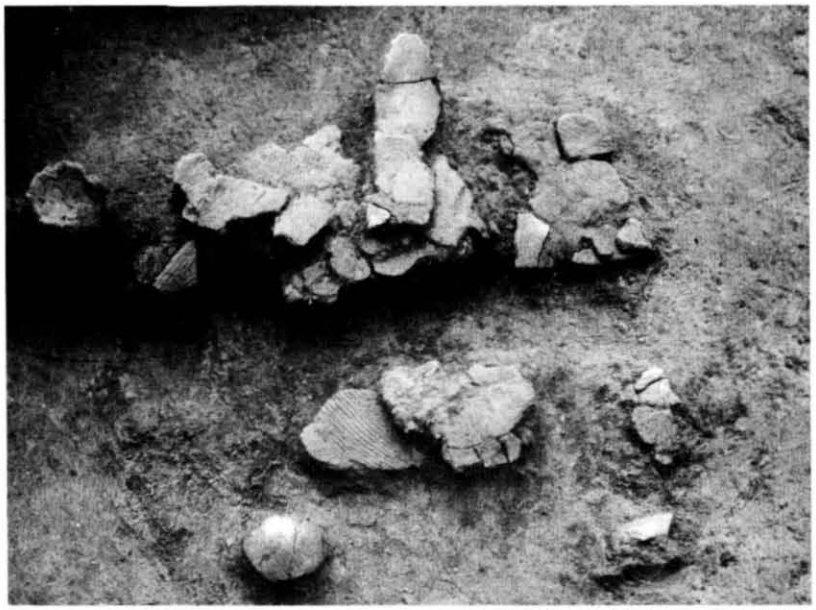


2. 第31号炉穴遺物出土状況



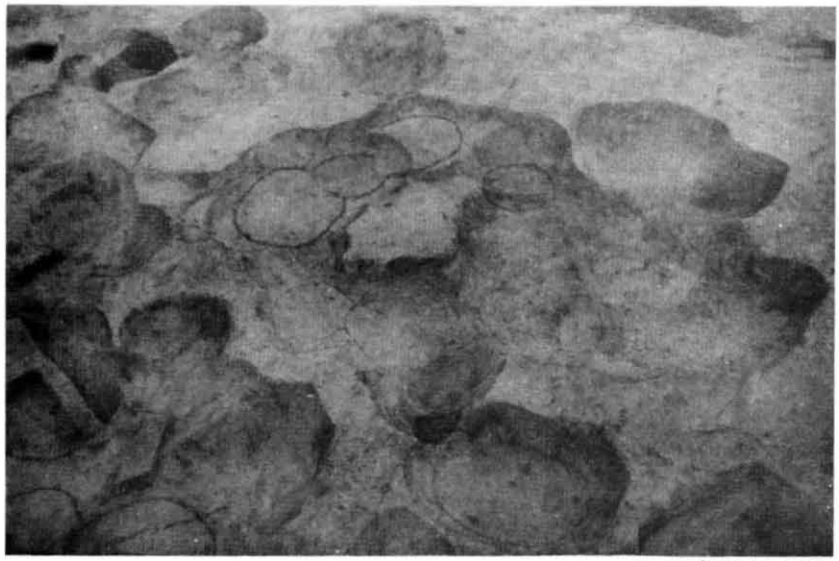
3. 第40号炉穴遺物出土状況

図版 6



1. 第14号土壙遺物出土状況

2. 第14号土壙遺物出土状況



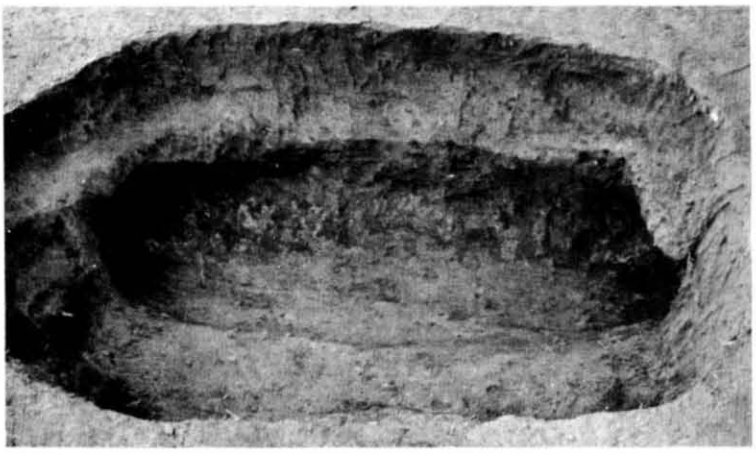
1. 炉穴群(工群)

2. 塚基段部遺物出土状況

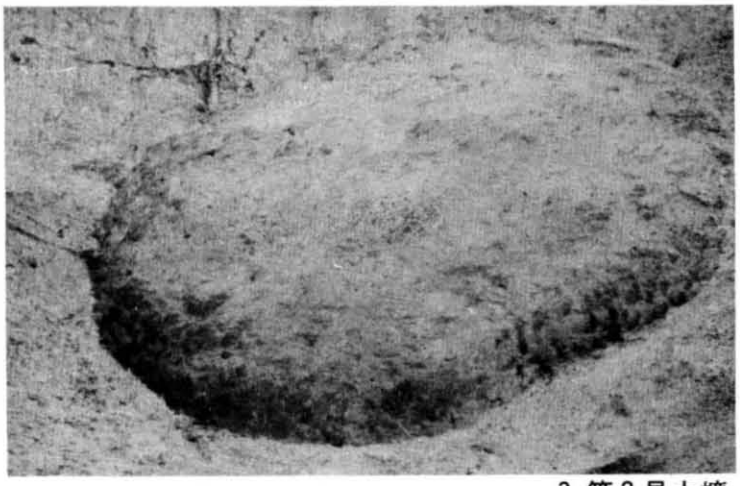
3. 第 1 号土壙遺物出土状況

図版 8

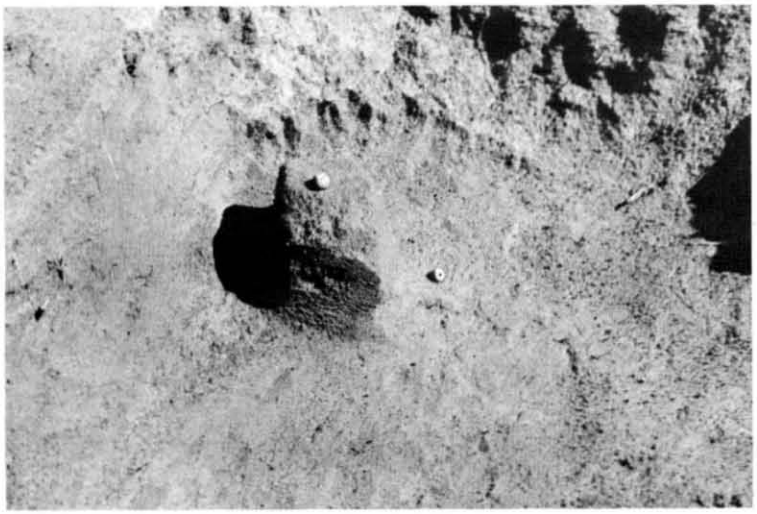
1. 第 1 号土壙遺物出土状況



2. 第 1 号土壙



3. 第 2 号土壙

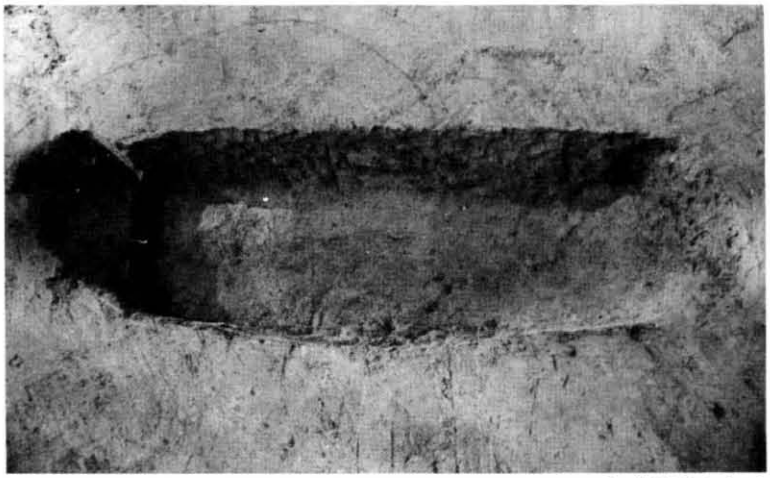


1. 第 5 号土壙
玉出土状況

2. 第 5 ・ 6 号土壙

3. 第10号土壙

図版10



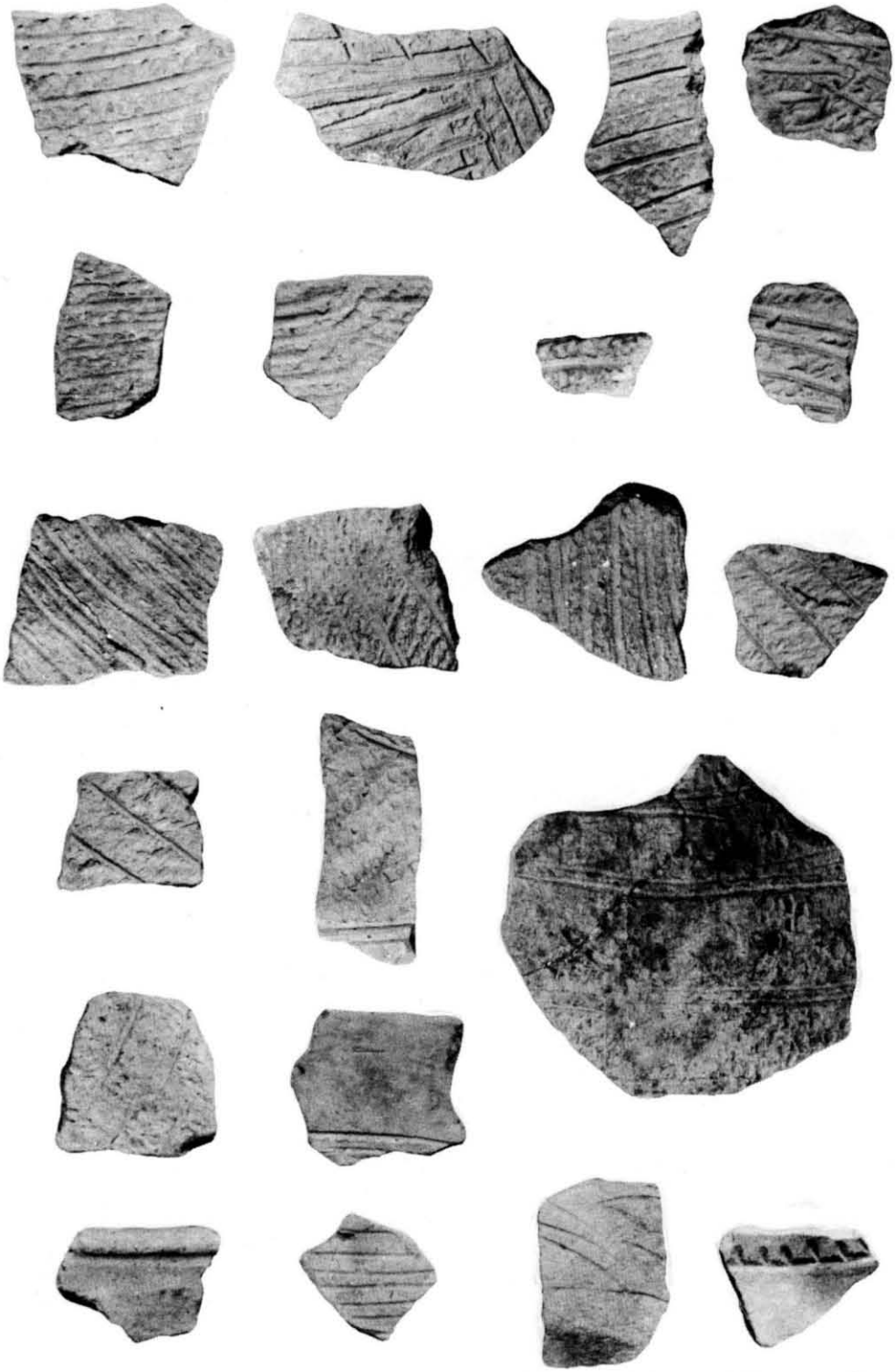
1. 第11号土壙

2.（E－4）Grid ナイフ形石器出土状況

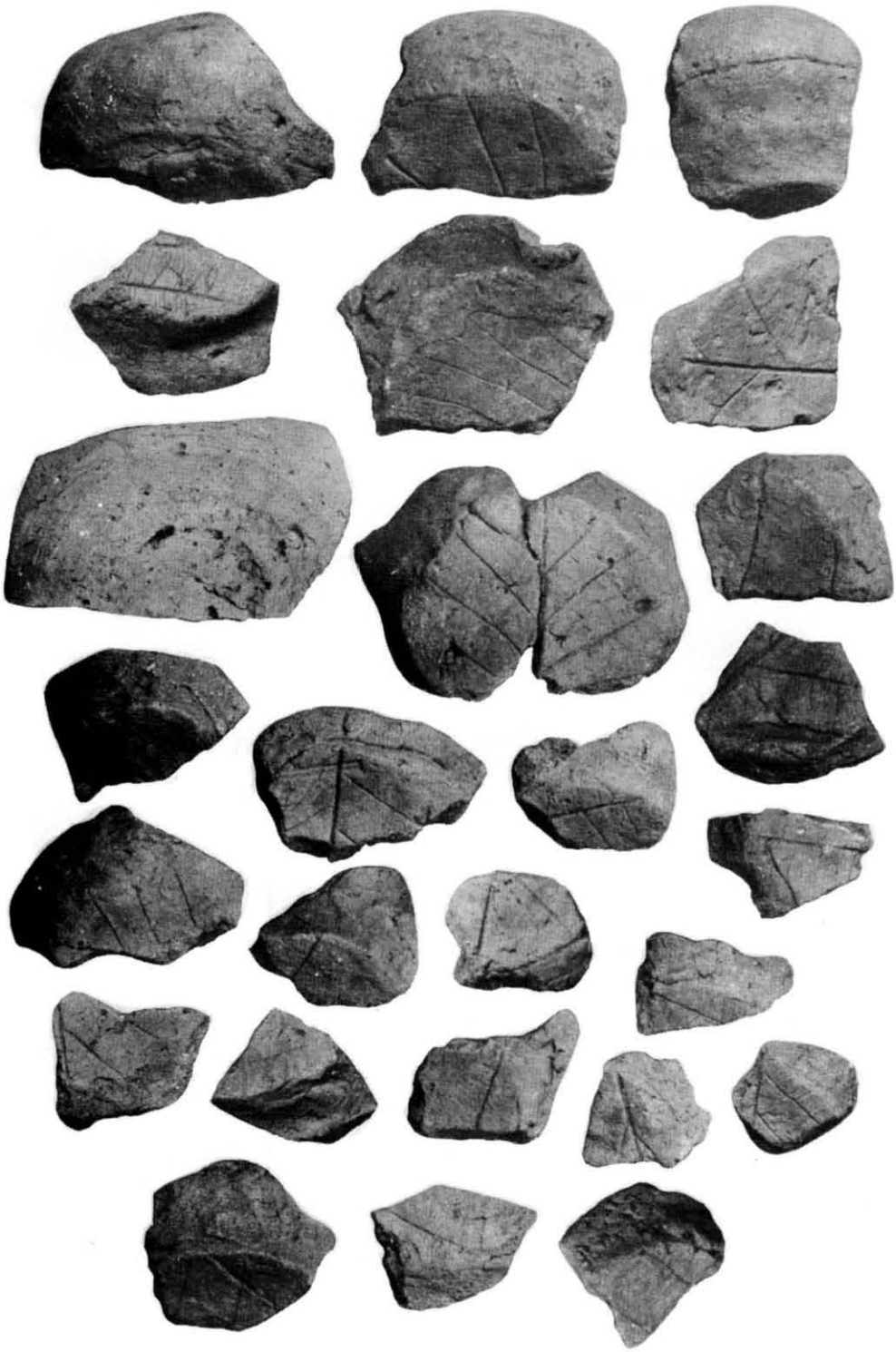
3. 第6号土坑内ポイント形 石器出土状況

盛土内出土遺物（縄文時代後期１）

図版12



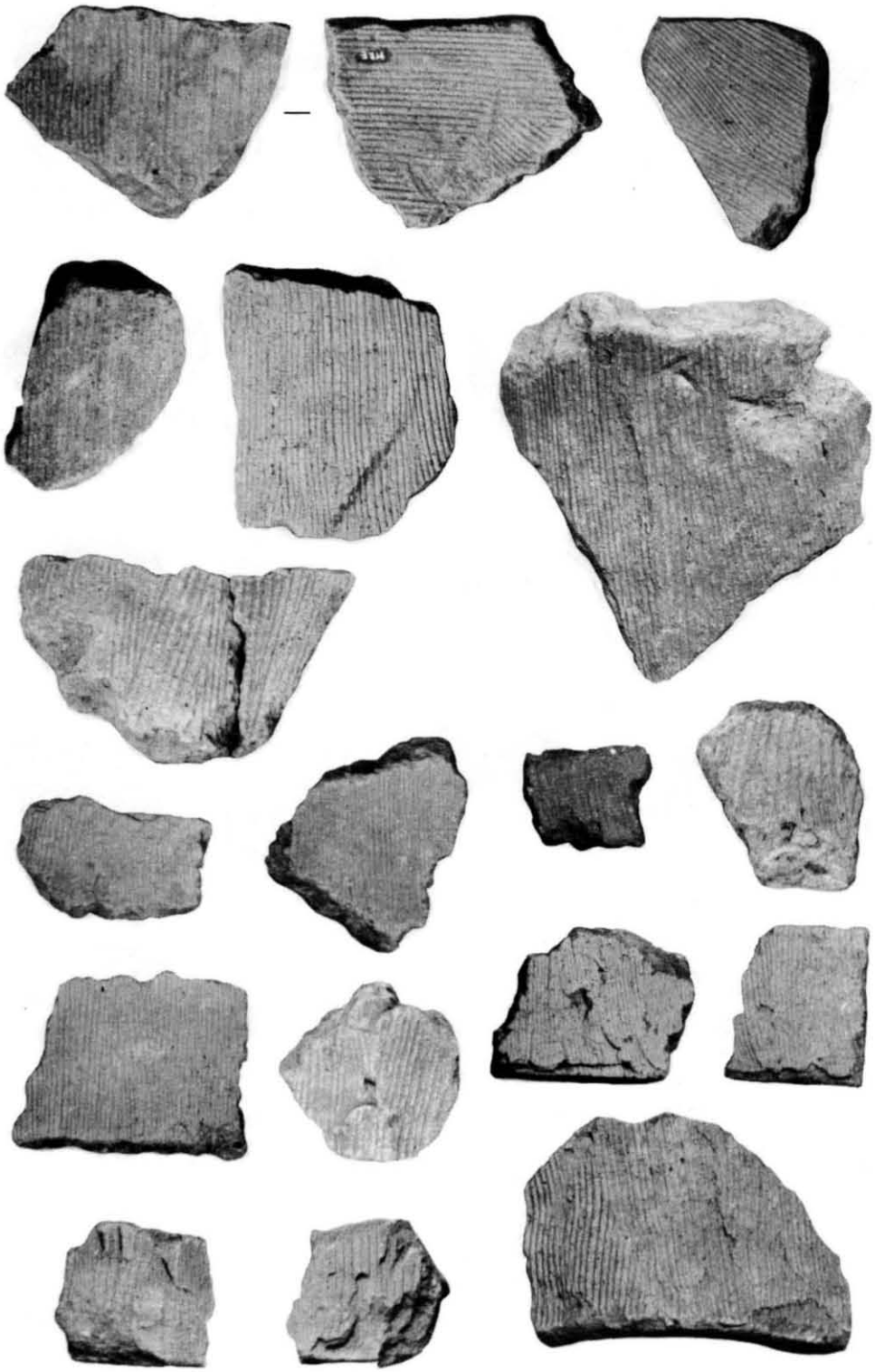
盛土内出土遺物（縄文時代後期２）



盛土内出土遺物（古墳時代１）

図版14

盛土内出土遺物（古墳時代２）

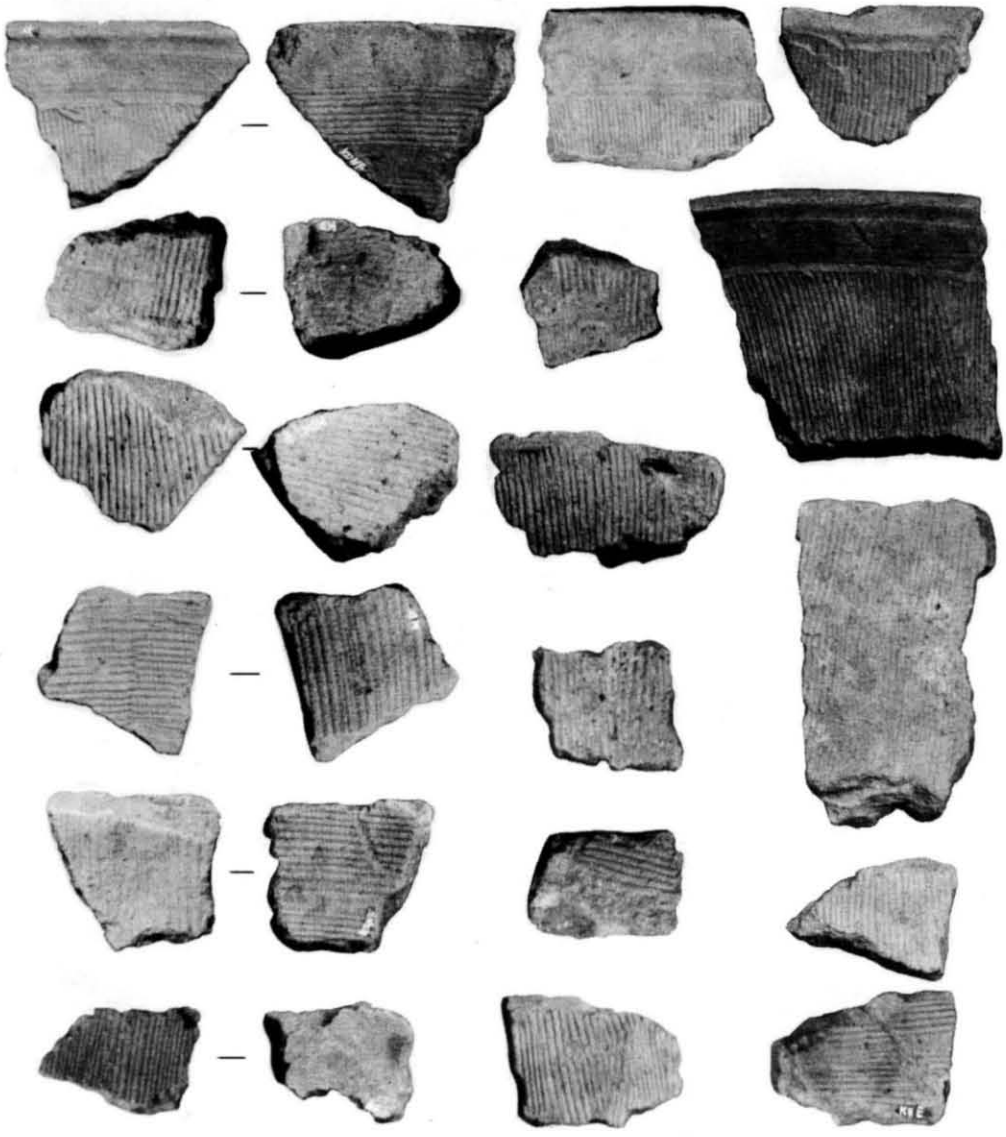


盛土内出土遺物（埴輪１）

図版16

盛土内出土遺物（埴輪２）

形象埴輪

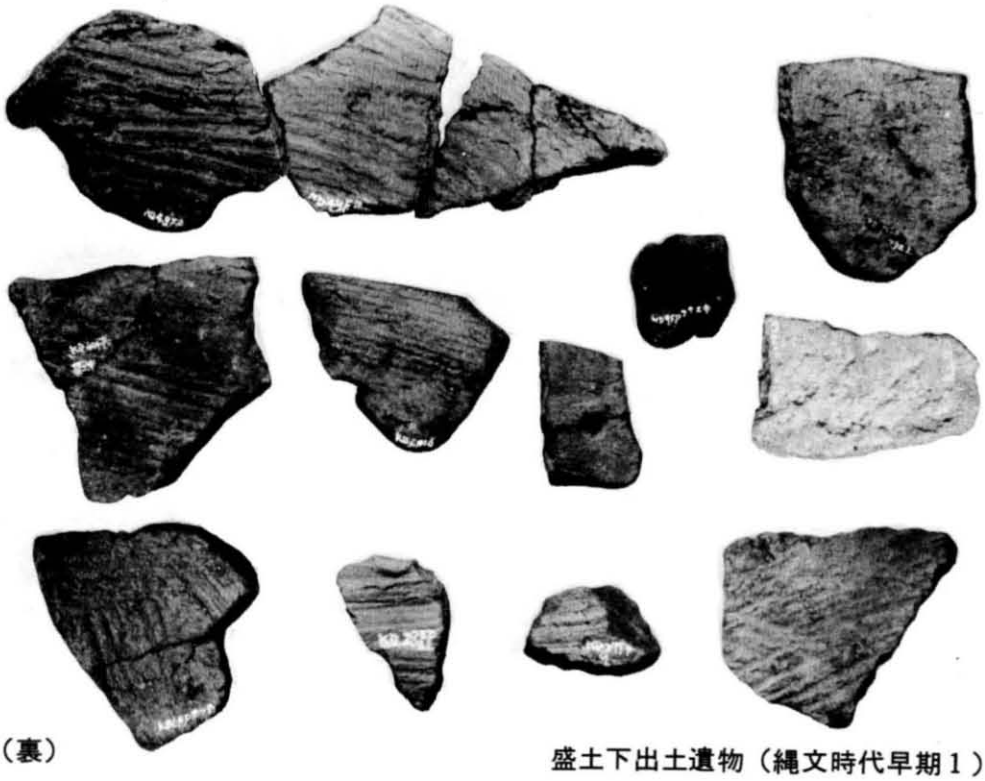


盛土内出土遺物（形象埴輪，埴輪３）

図版18

盛土下出土遺物（石器）

（表）

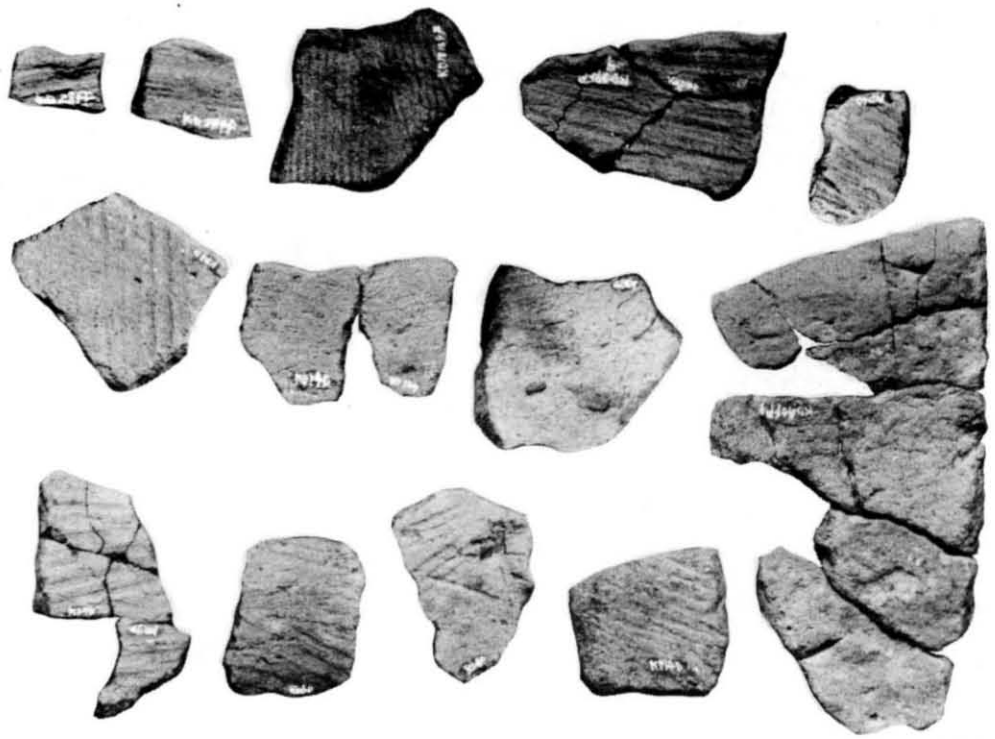


（裏）

盛土下出土遺物（縄文時代早期１）

図版20

（表）



盛土下出土遺物（縄文時代早期２）

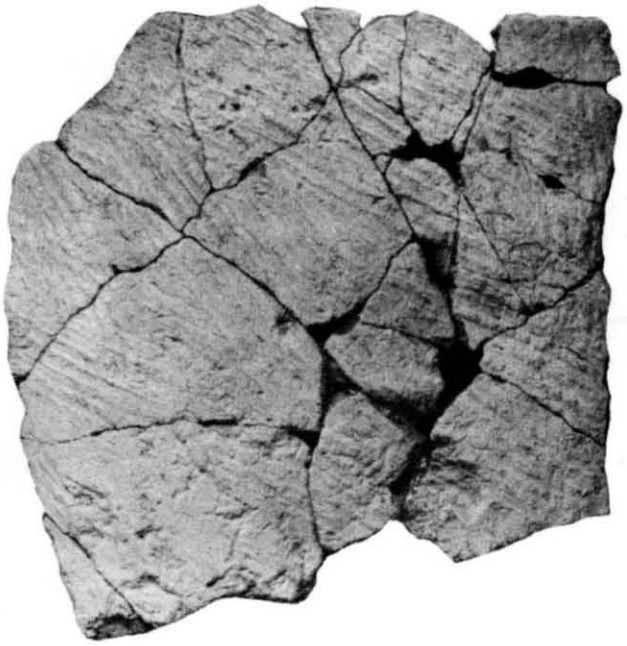
（裏）

（表）

（裏）

盛土下出土遺物（縄文時代早期３）

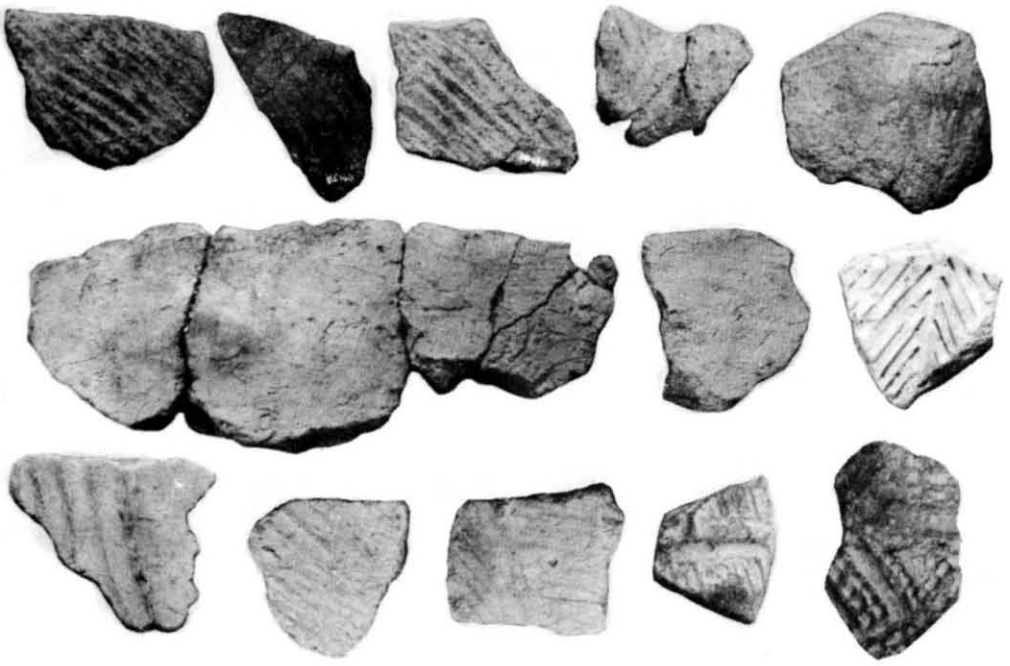
図版22



（表）

盛土下出土遺物（縄文時代早期４）

（裏）



（表）

（裏）

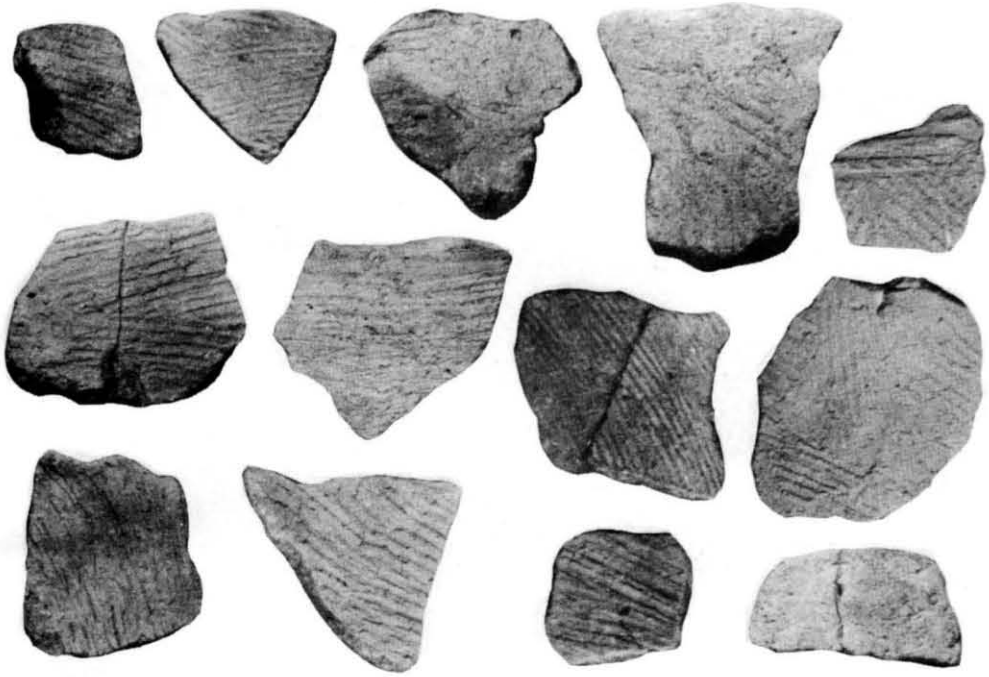
盛土下出土遺物（縄文時代早期５）

図版24

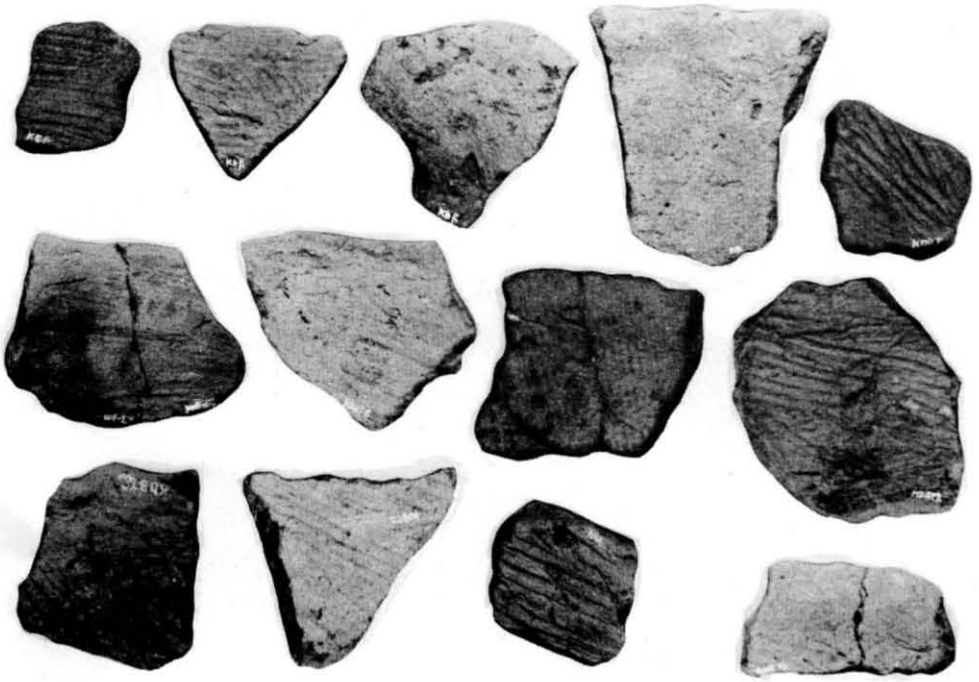
（表）

盛土下出土遺物（縄文時代早期６）

（裏）



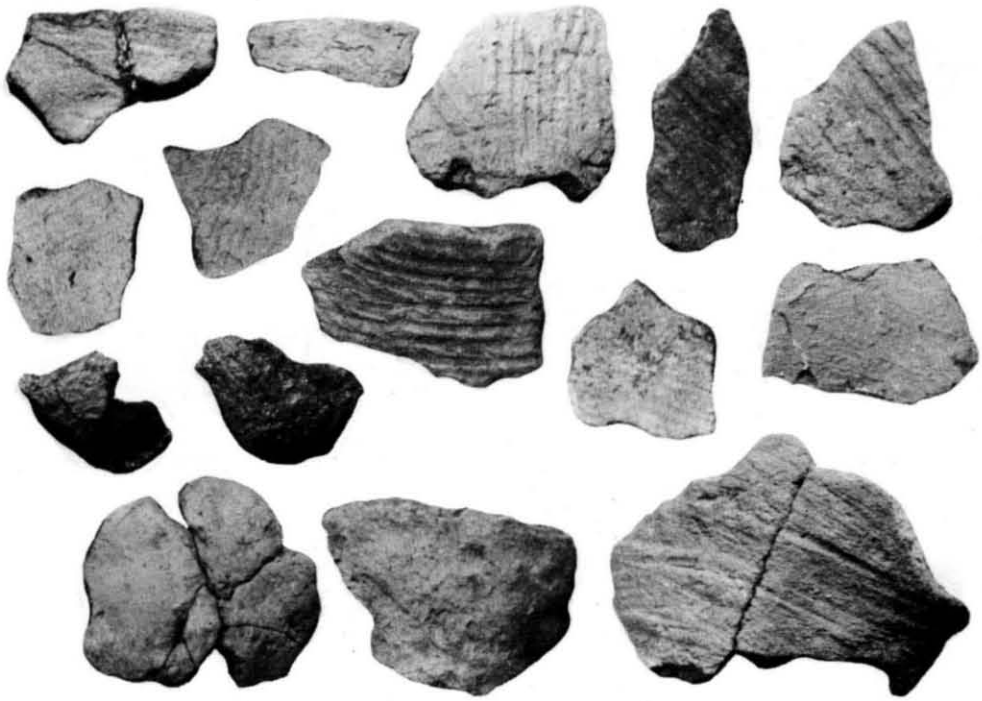
（表）



（裏）

盛土下出土遺物（縄文時代早期７）

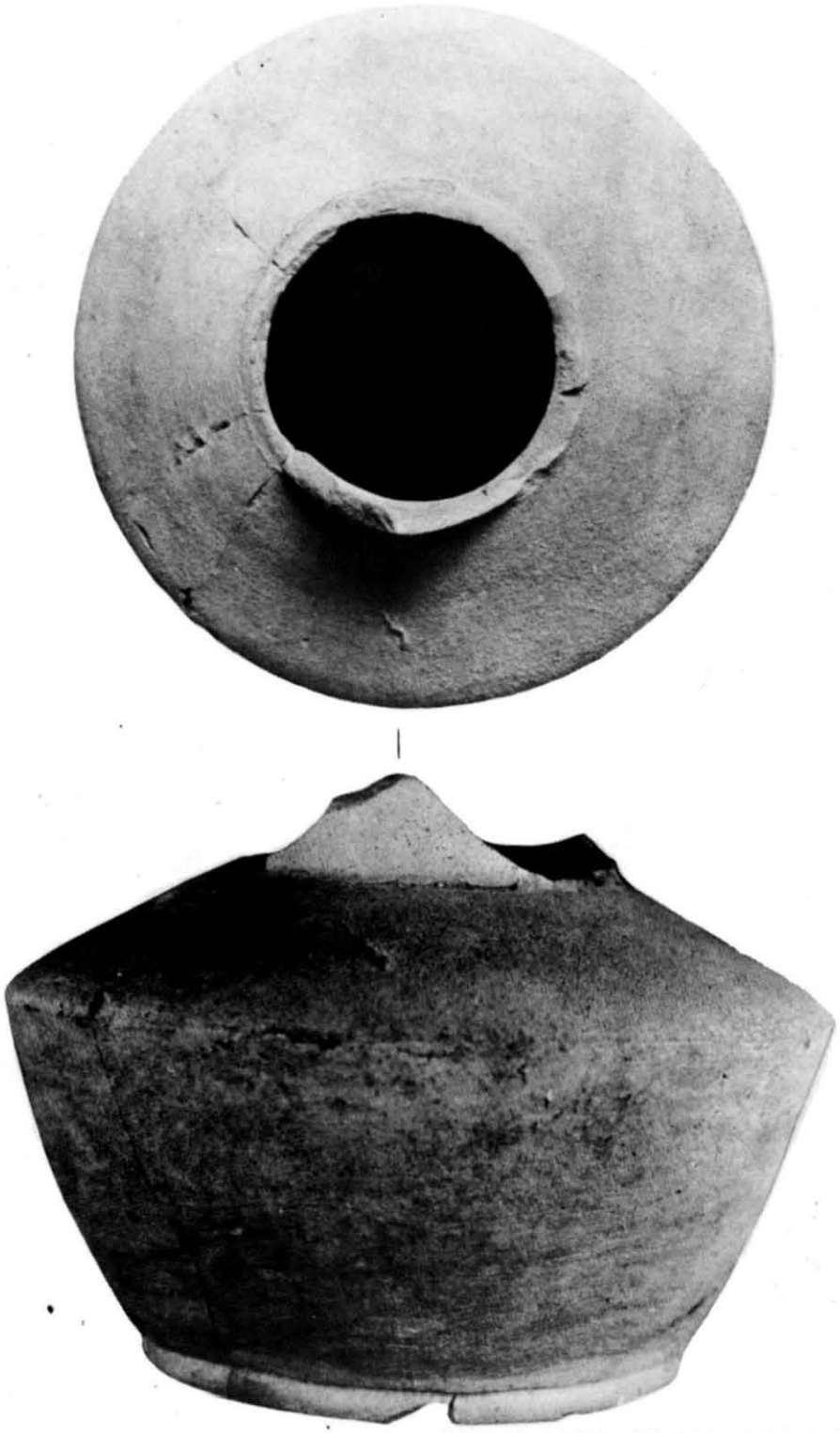
図版26



（表）

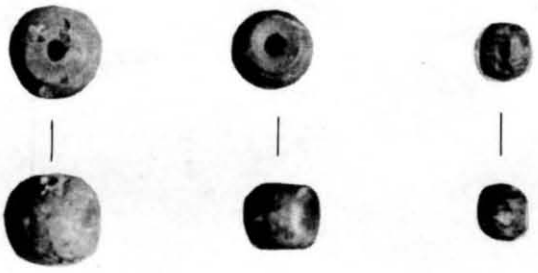
盛土下出土遺物（縄文時代早期８）

（裏）



盛土下出土遺物（第１号土壙出土遺物）

図版28



1. 塚基段部出土遺物 2. 盛土下出土遺物（第5号土壙出土遺物）

木戸台遺跡調査報告

昭和53年3月30日

編集者　木戸台遺跡調査団

発行者　横芝町教育委員会

印刷所　山本印刷株式会社